

大学出版

The Association of
Japanese University Presses

No.131
2022.9
夏

【特集】 現代中国の学術と出版

中国出版業界のなかの学術書 馬場公彦 1

中国の大学出版社

—— 改制後の危機と学術出版の堅守 田 雁 6

現代思想として中国を読む 石井剛 11

日記史料と中国史 八百谷晃義 16

日本における中国語作品の翻訳出版 松原理佳 21

【連載】 何年経っても忘れられない、編集者の一冊《6》

佐原秋生・大岩昌子著

『食と文化の世界地図』 川端博 表2

大学出版部ニュース 26



一般社団法人
大学出版部協会

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

何年経っても忘れられない、編集者の一冊(6)

佐原秋生・大岩昌子 著

『食と文化の世界地図』

川端 博 (名古屋外国語大学出版会)



写真ではわかりにくい、この本の初版にはもう一つ秘密がある。カバーが折り畳み式の二重になっており、広げると裏側が「食と文化の世界地図」なのだ。増刷分からはその「裏ワザ」はナシになったが、今でも初版の人気は高い。(ブックデザイン・出版会+荒川印刷) [名古屋外国語大学出版会・2018年/新書版・234頁・定価1320円]

とても合理的に、なめらかにつくられた本。企画の段階、著者お二人との相談、執筆、ゲラのやりとりから造本まで、予定通りにきちんとして進行した。売れ行きも、当会のベストセラー一、二位を争っている。編集者から見れば苦勞のない奇跡のような話だが、本当に特筆すべき「一冊」か？

しかしこの本にはいくつか秘密があつて、忘れられないものとなつた。

まず、執筆の半分以上を担当された佐原先生が、万年筆の手書きで原稿を書かれたこと。内容も素敵だったが、既刊四〇冊で唯一のデキゴトである。

印刷所も驚いていた。小さな四百字詰め原稿用紙、読みやすく、書き直しもほとんどないその「完全原稿」は、ゲラになつても赤字が少なかった。

いっぽう、コラム部分の大岩先生はデータ入稿。検索機能を駆使した情報満載の、バラエティに富んだテキストである。

昨今、食の文化に関連した書籍は専門化がすすんでいる。中国料理やイタリア料理、さらにその中での特異なテーマを追い続ける。新書でも同じ傾向はある。でもこの本、あえて新書版の本来の役割に徹するべく(?)、トータルな俯瞰図を目指すことにした。いうなればこの一冊で、とりあえず世界の食文化全体が読み取れるように構成されている。そんな手軽な入門書は、今もなおほとんど存在していない。

コンセプトを生かすための工夫のひとつは、本文で「世界の食の文化」を一四のエリアに区分けし、全て均等に、ページ割りしたことだった。これで、地球を丸ごと取り込める。佐原先生のアイデアである。フランス料理と西アジア料理が、対等に扱われるわけだ。その地域ごとの代表的な料理は、例外なく二種類に限定されている(日本は寿司ときりたんぼ鍋です！)。

いっぽう大岩先生のコラムでは「世界の食と文化」を扱い、映画・音楽・文学・法律など、食が文化そのものとして現象する姿が描かれている。

……当会の書籍づくりは、ここから本格的にスタートを切ったと思う。

中国出版業界のなかの学術書

馬場公彦 (北京外国語大学)

中国の知識文化と出版伝統

近代中国における出版業の歴史は古い。商務印書館(一八九七年成立)を嚆矢として、中華書局(一九二二年)、三聯書店(一九三二年)の出版社御三家は、今なお存続しているだけでなく、豊富多彩な実績を世に送り続けている。各社を代表する出版ラインとしてまず想起されるブランドといえば、商務の一九八一年創刊で八五〇点余りの点数を擁する「漢訳世界學術名著叢書」、三聯の一九七九年創刊で知識界の信頼の厚い雑誌『讀書』、中華の『四部備要』『二十四史』など膨大な漢籍叢書などであろうか。三社とも出版社の性格からいえば総合出版社に属するが、その出版物の大半は、日本でいうところの学術書に入る。

中国の出版物には学術書が多い。というよりも、出版される著述は古来からいわゆる「読書人」と称される学者・

知識人によるものだったから、極論すれば学術書ではない出版物はないとも言える。では様々な出版物のなかで、どこから学術書でどこからが学術書ではないのか。これまでに中国ではあまり強く意識されてこなかった。

いま中国ではどのような書籍が学術書として出版され読書界で受け入れられているのか。中国における学術書の定義、学術書として出版されているコンテンツの特徴、などを通して明らかにしてみよう。

学術書の定義と範囲

今なお、出版業界の動向分析において、出版社や出版物の分類として、学術出版社あるいは学術書という指標は、正式には採用されていない。したがって本稿では中国学術書の実態に関して、該当する出版社の経営実態や、出版動向などを統計データによって明証することはできない。

とはいえ、学術書の具体的な定義がないというのは、はなはだ不便である。各研究者や研究機関の学術成果を具体的な論文や書籍といった成果物でどう評価するか、研究プロジェクトの一部としての出版計画に対する助成申請の対象をどう絞り込むかといった、学術研究の運営に支障をきたすからである。

そこで出版研究を中心とするメディア学において、学術書の定義と範囲などの基本概念についての検討がなされてきた。中国語で「学術図書」というと書籍に限定されるので、さらに学術論文をも含む「学術出版」(英語の“academic publishing” “scholarly publishing”)に広げておこう。

孫玉(上海外語教育出版社)によると、学術の純度に対応して、①論文—②专著—③教材・百科全書—④科学普及書—⑤学術エッセイと序列化され、下位に行くほどに学術の成分比が低くなり、水分量が増えるとする。たとえば中国ロケット学の父とされる銭学森の著作例では、『流体圧縮可能な二次元音速流』は①、『気体動力学諸方程式』は②、『物理学講義』は③の教材、『航空機と宇宙空間』は④、『銭学森書簡集』は⑤に相当する。狭義の学術出版は①②で、①は学術雑誌(多くは大学や学会が運営)、②は専門(「專業」)出版、③は教育出版、④は一般書籍(“trade book”)とも称される。

馮智勇(北京医学出版社)によると、学術書の特徴としての創造性・科学性・専門性・理論性・系統性に照らせば、

A 専門図書—B 大衆図書—C 教育図書と高次から低次へとレベルが下る。日本でいえばAは学術専門書(一般にA5判上製)、Bは学術一般書(一般にB6・四六判上製)、Cは普及書(一般にB6・四六判並製、あるいは新書)に当たろう。では厳密に学術書の範囲を限定するとうなるか。葉継元(中国社会科学院中国社会科学院科学評価センター特約研究員、南京大学情報管理学院特任教授)は、『中国哲学社会科学類学術図書基本書目(1995-2005)』という、図書館収書担当司書向けの計量学的に学術価値の高い書籍のリストに掲げられた、学術書に含まれないカテゴリーに注目する。具体的には①大学専門学校以下の教材、②教育参考書、③資格・等級試験用教材、④職業教育用書籍、⑤普及読物、文芸作品、⑥辞典・資料集、⑦政策法规・政府出版物。これらの書籍を除いた同リストに採録された書籍総点数は一二万六一八点である。

このように学術書といっても、中国においては広義と狭義でその範囲と書籍点数は大きく違う。葉継元が引用する謝寿光(元社会科学文献出版社社長)の著作によると、二〇一三年時点で全国の出版機関のうち九割以上の機関が学術出版に携わっていると証言している。確かに中国の出版業界を概観してみると、広義の学術書でいえば、一部の美術書や児童書専門出版社を除き、ほぼすべての出版社が学術成果を基礎とする出版物を手掛けているといつて過言ではない。

コンテンツとしての学術書

次に学術書の実態を出版された書籍のラインナップからアプローチしてみよう。先述したように、学術書の定義と学術書とそうでないものの境界は曖昧なところがある。日本も最近では学術書に専門以外の読者にも届くような可読性が要求されたり、厚さといふ詳細な注釈といふ、学術書も顔負けの新書が出されたりなど、事情は似たようなところがある。とはいえ、日本では学術書とそうでないものの区別は、判型（A5判中心）・価格（高価）・部数（大半は千部以下）・装丁（上製で地味）・タイトル（緻密で長い）などによって少なくとも作り手の出版社の側では明確に意識されている。

中国では、学術書であるかそうでないかは、むしろ日本同様、外観から類推可能ではあるが、少なくとも装丁に関しては、読書人の年齢層が若いこともあり、一般書との間の見分けは付きにくい。

たとえば北京大学東門近くにある「万聖書園」という書店は、北京大学・清華大学はじめ多くの学者・研究者に利用されており、私も近所にあるため、学術書の動向をウオッチしたり、書評の対象本を探したりするために、毎月のように通っている。そこでは学科分類に応じた書棚構成がなされ、六〇〇平米の売り場面積に四万五〇〇〇冊の本がびっしりと開架されている。ジャンルも判型も造本も色と

りどりであるが、そのほぼすべてが学術書であることは、どの本でも手に取って立ち読みしてみればすぐにわかる。

中国の場合、タイトルからすら、学術書とそうでないものの区別は不分明で、とりわけその傾向は大家とされる高名な学者に著しい。たとえば『浅談』『札記（ノート）』『集』『通説』といった謙虚な書名を冠しながら、行文は高雅、内容は難解、思想は深遠といった書籍は枚挙に暇がない。さらに大学の教材として『〇〇概説』『〇〇通史』とつけられていたとしても、日本の感覚からすれば学術書であるものも少なくない。

文章体裁からしても、詳細な注のあるなしで学術書を見分ける目安になるとは限らない。そもそも中国の学術雑誌では、注の形式に厳格な規律があり、正しい引用処理をしないと学術上の不正行為とみなされ、逸脱した形式を採用するとピアレビュー（peer review「同行評審」）には通らない。したがって論文をもとに構成された書籍は、どれもこれも似たような体裁になる。

ただし日本や欧米の学術書と比べて、中国の学術書にはあまり見かけられないのは、いわゆる学術専著（monograph）といわれる、特定の分野・テーマを深く掘り下げた学術成果である。これはおそらく編集や資料のコストに対して発行量や収益の点での経済効果が見合わないことによるもので、日本でも助成金なしではこの領域の持続可能性は低い。

中国の学術書にほぼ例外なく共通してみられる特徴は、

その厚さである。なぜ中国の本、とりわけ学術書は重厚なのか。その要因のひとつが、体系性へのこだわりである。日本の学術書がよく重箱の隅をついたようだと言われるのは、確かに日本の学者の職人芸的なほどの特定領域への完全無欠さへの専念によるものであるが、学術研究の場合には、研究者のオリジナリティの追求によるものと言えなくもない。とりわけモノグラフの場合、全体系を叙述することには重きを置かれない。だが中国では全過程・全領域をカバーすることに専念する。閲読していると、どこまでが通説でどこからが自説なのかを見分けるのが難しい。

両国間の学術書の志向性におけるこの違いは何に拠るものか。いくつかの要因が考えられようが、出版文化における新書と講座の歴史の有無は考慮に入れておく必要があるように思う。

中国の出版業界には、日本の新書文化に相当するブランド開発や出版活動の歴史がない。ここ一〇年ほど、日本の新書は中国で歓迎され、各社の新書コンテンツの版権は中国出版市場で活況を呈している。だがなぜか製品化される新書の判型でなくなり、斤量の大きい用紙を使ったりスカスカの組にしたり図版をふんだんに取り入れたりして嵩増しされる。万象を網羅せず、一冊一テーマで分かりやすく親しみやすくという精神が浸透しない。日本の出版文化に根付いている「軽薄短小」に有難みを感じていない。

大学に籍を置いていると、大学には良くも悪くも象牙の

塔の伝統があり、社会教育とか市民セミナーといった教育サービスに注力がなされていない。一流大学の名教授による選りすぐりの講座を、広く市民に開放するというモットーで案出された各分野・各テーマのもとに論考を集めた『講座』という出版伝統が、やはりここには根づいていない。新書にせよ講座にせよ、大衆に広く知識を啓蒙するという取り組みは、ネットを通じたオーディオレクチャーのアプリが盛況で、そちらが「知識付費」と称されるビジネスとしての積極的展開をはかりすっかり定着している観がある。

出版ビジネスを通じた知識交流を

中国では目下、積極的に「走出去（海外に打って出る）」戦略が図られている。そのために中国民法典をはじめとする知的財産権（「知識産権」）の法的保護を重視し、国家ぐるみで知財の育成と侵犯への厳罰化を進めている。出版業界ではこれまでの一方的な版權輸入から積極的な版權輸出を図り、とりわけ知財のグローバル展開を目指して、学術書の海外翻訳を重視している。そのために「中華学術海外翻訳プロジェクト」をここ数年、毎年推進しているが、なかなか目覚ましい成果は上がっていない。とりわけ日本では不振で、翻訳される中国のコンテンツの大半は文芸の通俗作品に限られる。

これは中国の出版物を注視している日本の専門家の大半

が、日本の大学の中国文学科に属しているという中国学の伝統的特性によるものだ。だが必ずしも中国の學術動向や読者の潜在的知識欲とマッチングしていない。

いっぽう社会科学の目利きは手薄である。ましてや伸長著しい中国の先端科学やIT技術など自然科学の分野は、本格的な書籍の翻訳はほぼ皆無に等しい。日本の専門家と出版社は、中国の學術動向を積極的にウオッチし、翻訳を通して學術交流に乗り出してほしい。

海外の学問あるいは特定の国家への知的関心を下支えるのは、その国の母語の習得である。北京で漢語学習に勤しむ筆者の実感から言えば、中国における中国語教育の歴史とノウハウは端倪すべからざるものがある。語学専門大学や重点総合大学には、必ず他の学部と同格で対外漢語学院が設置されており、言語学と語学教育の教育と研究がなされ、非中国人に漢語を教えるための教材と人材が豊富に蓄積されている。日本の中国語教育はその資源をもっと有効活用すべきだと思う。

今年には国交正常化五〇年。日中間の出版界においては、日本から中国への一方的版權輸出という版權交易の不均衡状態が顕在化している。知識交流を正常化するために、日本の出版業界、とりわけ大学出版社を中心とする学術系出版社が取り組むべき課題は多く、役割は大きい。

参考文献

孫玉「學術出版」辨」『出版广角』二〇一〇年五月
馮智勇「學術圖書出版基本概念研究綜述」『編輯之友』二〇一一年一月
葉繼元「學術圖書、學術著作、學術專著概念辨析」『中國圖書館學報』二〇一六年一月

教育部社会科学司編『中國高校出版社發展報告 2005 - 2010』中國人民大學出版社、二〇一一年

万聖書園のHPは <http://www.allagesbooks.com/>

中国における知財權保護については馬場公彦「私權の保障を規範化した中国民法典」参照。 <https://hon.jp/news/1.010/20652>

学問の自由の国際比較

— 歴史・制度・課題 —

羽田實史・松田 浩・宮田由紀夫 編

世界的変容の中にある「学問の自由」をどう捉えるか。欧州、米国、日本、中国など各国の法と保障の体系、近年の侵害事象などを網羅する。



A5判 定価6490円



岩波書店
東京・千代田・一ツ橋

<http://www.iwanami.co.jp/>

中国の大学出版社 ——改制後の危機と学術出版の堅守

田 雁 (南京大学出版社)

現代中国の大学出版社の歴史は、一九七八年の人民大学出版社「復社」から始まり、すでに四四年に及ぶ。この間、大学出版社は驚くべき発展を遂げ、優れた実績をあげてきた。二〇一九年の時点で、大学出版社(一四社)は、全国の出版社数の19%、従業員数の25%を占め、その刊行物は全国の出版点数の30%、売上高の45%を占めている¹⁾。

二〇〇七〜一〇年の「転企改制」は、大学出版社にとって重要な転換点となった。転企改制とは、企業法人体制(株主総会、理事会、監事会)の設置によって、大学出版社の事業を分離する改革である。大学は出資者として株主権益を行使する一方、出版社の日常経営には関与しなくなった。また、出版社の社員の身分も「事業者」(准公務員)から「企業人」に変わった。こうして、大学出版社の経営自主権を向上させ、運営能力と市場化のレベルを強化したのである。しかし、転企改制は、大学出版社の地位と組織

構造にかつてない変化を引き起こした。

本稿では、中国の大学出版社が直面している厳しい現実について述べ、危機に対処し懸念を解消することが喫緊の課題となっていることを示したい。おそらく、日本の大学出版が抱える課題との違いや共通点も浮き彫りになるだろう。

三大危機

二〇二〇年以来、中国の出版界は三大危機に直面している。すなわち、①図書小売市場の「碼洋」(定価×出荷部数)がマイナス成長となったこと、②オンライン販売額が店頭販売額を超えたこと、③新型コロナウイルスの流行によって読書習慣が変化したことである。

中国新聞出版研究院の魏玉山院長は「二〇二〇年度中国出版業発展報告」を発表し、新型コロナウイルスが「出版業の生産

運営モデルに根本的な変革を迫っている³⁾ことを明らかにした。近年、中国の図書小売市場は安定成長を維持し、二〇一〇年の三六九億元から二〇一九年の一〇二三億元(約二兆円)に上昇していた。しかし、二〇二〇年にその売上高は九七一億元となり、約5%の下落幅を記録した。こうした事態は、出版業の発展に警鐘を鳴らしている。

ネット販売の売上高は二〇一六年にすでに店頭の売上高を超え、急成長を続けてきたが、店頭売上高は三〇〇億元を維持してきた。しかし、二〇二〇年にネット販売の売上高が七六七億元に及んで記録を更新した一方、店頭売上高は二〇四億元へと大幅に減少した。

また、「二〇二〇年中国図書市場報告」によると、現在、読者の読書形態はすでに「紙(書籍)・電(電子書籍)・音(音声読み物)・並行」の傾向を示しており、読書時間の割合は電子書籍(47%)、紙書籍(31%)、音声(22%)の順になっている³⁾。このような読書形態と読書時間の変化は、いざれも「電子出版」がもたらしたものであり、紙の本を主体とする大学出版社にとっては良いニュースではない。

三大隱憂

冒頭で述べた「転企改制」によって中国の大学出版社は、国家政策による優遇と事業身分の庇護を失ったため、市場競争と利益指標の二重の圧力の下で、三つの懸念を抱えることになった。

第一に、大学の資産集団(国有資産)管理体制の下に置かれている大学出版社は、経営自主権を持つものの、自ら金融資本・社会資本を誘致して合併再編などを行うことはできない。また、一般の税金に加えて、利益の一部を大学に納める必要がある、「学校に数千万人民元を納める大学社は少なくない」という⁴⁾。

第二に、企業としての利益を追求するか、大学の使命を守るかという難しい選択に直面している。大学出版はその名の通り大学の教育と研究に奉仕し、先進文化の伝播を目的とし、教科書と学術的著作の出版を主体とする。しかし、税制優遇と大学からの財政支援を失った出版社は、利益を追求して大衆的な商業出版に足を踏み入れざるをえなくなった。その中で、一部の出版社は大学の使命を守るという役割を果たせなくなる場合もある。

第三に、デジタル化に対応する技術が不足している点が挙げられる。電子出版に力を入れることはすでに共通認識となっており、今日では、大学出版社の「76%にデジタル音声・映像があり、74%に電子書籍があり、66%にネット教育資源があり、61%にデジタルリポトリがあり、50%にデジタルコースがあり、37%に携帯電話アプリ⁵⁾がある。このようにデジタル化事業は多岐にわたるものの、全体として技術面で劣る傾向があることは否めない。これはもちろん、大学出版社が持つ資源によっても制約されるが、デジタルシフトの困難が発展の見通しに影を落としている。

大学出版社の組織構造

さらに、転企改制後の大学出版社の組織構造には異質な変化が生じた。具体的には、以下の三つのモデルに分けることができる。

① 図書＋雑誌の二重センター経営モデル これは主に清華大学、北京師範大学、浙江大学、北京大学出版社などを代表とする。例えば清華大学出版社は、「学術出版と雑誌の二つのセンターを設置し、……図書、音声・映像製品、電子出版物、雑誌、ウェブサイトなどの多種のメディアを融合した立体的出版構造を実現した」とされる。その雑誌センターは、『清華大学学报（自然科学版）』をはじめ二二種類の中英文雑誌を刊行している。

② 図書＋海外会社経営モデル これは主に広西師範大学出版社、外国語教育研究出版社などを代表とする。例えば広西師範大学社は、広西師範大学社（北京）有限会社をはじめとする二二社の全株を保有するほか、六社の海外会社を傘下に収め、イギリス、シンガポール、アメリカ、オーストラリアなどに事業を展開している。外研社も同様に、中国文化、人文社会科学、一带一路、デジタルメディアなどの四大出版部のほか、海外出版センターを設け、一二カ国のテーマ編集部などを有している。

③ 伝統的な図書経営モデル これは現在の大学出版社の主な運営モデルであり、約八割がこのように運営されている。

る。南京大学出版社（以下、南大社）を例にとると、傘下には大学教材、人文社会科学、基礎教育および児童図書などの四つのセンターが設置されている。このモデルでは、各社の組織構造に大きな違いはない。

学術出版からの逸脱と学術出版の堅守

(1) 学術出版からの逸脱 現在の大学出版社の学術出版には、三つの短所が存在する。

第一に、じつは、ほとんどの大学出版社は学術出版を「主業」としていない。中国の出版社の七割以上が学術出版に足を踏み入れているが、実際に学術を主業とする出版社、すなわち学術図書の出版比率が50%を超える出版社は五社しかなく、社会科学文献出版社（93%）、中国社会科学出版社（80%）、上海古籍出版社（66%）、経済科学出版社（62%）、首都経済貿易大学出版社（51%）の順である。つまり、大学出版社のなかで学術図書の割合が五割を超えているのは、首都経済貿易大学出版社のみである。

第二に、学術図書の規範性、引用ルールが厳格ではない点。欧米の出版界では、「シカゴ・マニュアル」など統一的な規範が形成されているが、中国では、この問題は長年重視されていなかった。そのため、国家新聞出版総署は二〇一二年に「学術著作の出版規範のさらなる強化に関する通知」を公布し、索引・引用文・注・参考文献は「学術著作に不可欠な重要な構成部分であり、学術研究の真实性、

科学性、伝承性を体現している。……規範を強化し、国の関連規則を厳しく守らなければならない」と明確にした。総署文書の発行後、学術書の規範性、引用ルールなどの問題は改善されてきている。

第三に、学術審査制度の欠如を指摘できる。中国の大学出版社では、「出版評価は出版専門活動として扱われ、学術評価において役割と影響を果たさず、その範囲外に遊離しているようだ」⁽¹⁰⁾。このような状況が現れた背景の一つには、大学学術委員会の役割の欠如がある。中国教育部が制定した「大学学術委員会規程」の中では、学術委員会は多くの審議に参加することが要求されているが、大学出版社の学術書についての項目はない。それゆえ、学術書に関する審査は大学出版社自身が担うしかなく、それによって主題の検証と原稿審査のレベルが下がった。

(2)学術出版の堅守 このように学術出版の前途は決して明るいとは言えないが、学術出版を堅守することの意義もまた重視されている。興味深いことに、各社の公式ウェブ

サイトを開くと、口を揃えて学術出版の道に沿って研鑽を続けるという宣言がある(南大社においては「学術立社、ブランド興社」)。学術出版は大学出版社の本来の使命であると同時に、「思想伝播と文明伝承の機能を担い、人々のオリジナリティと革新性の知識消費に対する需要を満たし、出版産業チェーン全体の先端にある」。

南大社では、毎年の学術図書の売上は総売上の15%にすぎないが、「中国思想家評伝叢書」(二〇〇〇巻)、「全清詞」(七〇巻)などは、すでに「学術ブランド」のベンチマークとなり、国家級の図書賞を受賞しただけでなく、学界でも高く評価されている。そのうえ、二〇二二年四月に南大社は大学に三千万円を寄付し、「南京大学文系発展基金」として、文系分野に対する「反哺」を通じて、学術出版のブランドを高めることを目標としている。

では、今後の中国の大学出版社はどこへ向かうのか。実際に、一部の大学出版社が改制後に過度に市場化し、学術出版から逸脱した現実について、一部の有識者はす

日ソ戦争 南樺太・千島の攻防 領土問題の起源を考える

富田 武 ヤルタ密約前後の米ソの角逐から、ソ連の南樺太・千島占領と併合、現在まで。戦闘の全貌と詳細を中心に描く。¥3740

慰安婦問題論

ソー 慰安婦にされた女性を飲み込んだ蔑視と搾取の濁流。二元論を解消する、待望の本質論。山岡由美訳 和田春樹解説 ¥4950

中国の「よい戦争」

甦る抗日戦争の記憶と新たなナショナリズム

ミッター なぜいま抗日/日中戦争か? 人々の変化とは? 英国の専門家が新潮流を読み解く。関智英監訳 濱野大道訳 ¥4840

アンネ・フランクはひとりじゃなかった

フェルーフエン 隠れ家に潜むまでの、(広場の少女アンネ)と親友たち。劇的な人生を史料から再現。水島・佐藤訳 ¥4620

ソーシャルメディア・プリズム

SNSはなぜヒトを過激にするのか? ペイル アイデンティティを屈折させる SNS のプリズム作用を、Twitter Bot のフィールド実験で分析。松井信彦訳 ¥3740

誰も正常ではない

スティグマは作られ、作り変えられる
グリーンカー スティグマは烙印というより、文化が作る「プロセス」だ。心理人類学の視点で描くスティグマ史。高橋洋訳 ¥4840

カルマン

行為と罪過と身振りについて
アガンベン カルマンは仏教の業(ごう)。真我は踊り手。目的と意志の固着を解いた「手段の政治」とは。上村忠男訳 ¥4620

東京文京本郷 2丁目20-7 **みすず書房**

tel.3814-0131 fax.3818-6435(税込)
www.msuz.co.jp

に反省している。清華社の呉培華編集長は、「大学出版社が企業転換を完了してから一〇年以上になる。私たちは振り返って反省すべきだ。利益のためにどんな本を出版してもよいのではなく、大学出版者の職責と使命を第一にすべきだ」と述べた。⁽¹³⁾ 西安交通大学の林全氏は、「現在、大学出版社は教材の出版を保証する十分な出版基金が不足しており、学術圖書の順調な出版を保証する学術出版基金が不足している。大学出版社は大学の教育科学研究サービスであるが、大学には高等教育と大学出版の一体的管理を保障する有効な措置がない。……大学出版社にとって極めて不公平である」と主張した。⁽¹⁴⁾ 中国メディアア大学マスコミ研究院の趙麗華氏は、「大学出版社を「大学二級学院に復帰させて管理すること」、「大学の学術委員会（資産会社ではなく）の下で出版委員会を設立し、大学出版社の運営を具体的に指導、監督する」ことを提案した。⁽¹⁵⁾ このように、企業への転換を堅持するか、それとも再び大学の二級管理に復帰するかは、中国の大学出版社が直面している「ハムレット的な」選択となっているのである。

注

- (1) 李成保、新時代の大学出版社の発展方向を探る『N』、中国経済時報、2021/3/31
- (2) 穆宏志、二〇二〇出版業変革自信の信号を伝達する『N』、中国出版メディア商報、2021/1/25

(3) 京東圖書、艾瑞諮問、二〇二〇年中国図書市場報告 [EB/OL]、2021/4/27

(4) 陳香、大学出版の選択：商業帝国を建設するか、それとも文化の使命を担うか『N』、中華読書報、2012/1/14

(5) 趙中平、新冠疫情の下で大学デジタル出版の発展を探る『J』、現代出版、2020(5)

(6) 清華大学出版社ポータルサイト [EB/OL]、清華大学出版社—企業概要 (tsinghua.edu.cn)

(7) 広西師範大学出版社ポータルサイト [EB/OL] (www.bhpress.com/resource/kcc.pdf)

(8) 謝寿光、学術出版研究 [M]、北京：社会科学文献出版社、2018、63-69

(9) 中央人民政府ポータルサイト [EB/OL]、学術著作出版規範のさらなる強化に関する通知、2012/9/24(www.gov.cn)

(10) 冷桥勳・李克明、大学出版社学術著作出版の現状と対策分析 [J]、現代出版、2016(3)

(11) 教育部のホームページ [EB/OL]、高等学校学術委員会規程、2014/1/29 (moe.gov.cn)

(12) 注 8 前掲文献。

(13) 呉培華、使命と担当：大学出版はどのような道を歩むべきか [N]、中華読書報、2019/9/18

(14) 林全、新時代、大学出版の仕事の新しい征途 [J]、出版広角、2018(8)

(15) 趙麗華・呉俊庭、調整の中で前進する：現在の大学出版社の発展態勢に対する反省 [J]、出版広角、2019(20)

現代思想として中国を読む

石井 剛 (東京大学)

「文」の伝統

中国は書物と歴史のくにであり、文化実践はどんなに厳しい政治条件下でも絶えることがない。文化の影響力が大きいからこそ政治的弾圧の苛酷さが尋常でないのもまた事実である。だがだからこそ、中国の文化には強靱なレジリエンスがある。比較的近い歴史では、清代の文字獄が有名だが、強権的な文化弾圧の一方で、中国文明史上に燦然と輝く清代考証学が花開いている。これは、文献学的学問であり、その中には、原始経典が編まれたころの漢字音(古音)を復元しながら体系化しようと試みた音韻学や、明代後期以降にイエズス会宣教師がもたらした西洋の天文学や数学の知見を經典解説に応用した天文曆算学のような方法論上の重大な革新が含まれていた。

清代考証学は二〇世紀に入って帝國的王朝体制から近代

的民族国家へと中国文明が大きな転換を果たしていくのを後押ししていく。復古的な学風がナショナル・アイデンティティの基礎を提供したのだ。その意味では、圧制による言論の封殺が奏功するのは一時的であり、むしろそれは負のエネルギーとして蓄積し、ひとたび噴出すれば新しい政治構想へと結びつく。文化と政治とのあいだに孕まれる緊張関係は、文化の側ではなく政治の側にとってより深刻な脅威である。それが中国文明における「文」の伝統である。また、清代考証学の方法が外来文化との邂逅に促されながら登場していることにも着目したい。「文」は開かれながら前に進む。そうであれば、域外にいるわたしたちと中国の思想とは無縁ではない。

西洋思想の吸収

今日の中国における思想状況の特徴として、一つには、

アヘン戦争以降に基調となった西洋からの思想吸収の勢いが強まりこそすれ衰える気配がないことを挙げたい。また、この流れには常に反動として民族的自覚とも言うべきアイデンティティ回帰が表裏をなしてつきまとうことにも自ずと関心が向かう。国際化と民族化が表裏一体となつて今日の中国がある。それは典型的なモダニティのありようであり、中国で現在観察される諸状況への批判はモダニティ批判として普遍化される必要があるだろう。現代思想として中国を読むとはそのような試みに他ならない。

西洋からの思想吸収という点において最も顕著なのが、近代的ナショナリズムとマルクス主義の需要であつたことは言うまでもない。インターナショナルな運動を指向するマルクス主義がナショナリズムとのあいだで緊張関係を孕むのは中国においても同様だ。特に一九八〇年代以降になると、ロシアソ連型マルクス主義から、西欧マルクス主義や初期マルクスの疎外論へと関心が転回していく。また、全国大学統一入学試験制度の復活（一九七七年）により、労働者・農民・兵士に代わつて体系的な中等教育を受けた若者が大学教育を享受するようになると、彼らは新しい思潮潮流の積極的な受容者兼紹介者となり、「文化ブーム」が巻き起こる。彼らは卒業後に海外へと学問探究の場を求め、大学院以降のアカデミック・キャリアをアメリカで積むというコースが今日まで受け継がれている。西洋からの思想吸収は、英語経由が他を圧倒しており、それが中国国

内に物的・人的に還流して国境を融通無碍に越えた思想圏域を構成している。例えば、ニューヨーク大学で比較文学と批評理論を研究する張旭東がそうした圏域の中心にいる。彼はフレデリック・ジェイムソンの北京大学講演（一九八五年）に感銘を受けて渡米後にその教えを受け、アメリカで発展を遂げたマルクス主義的批評理論やフランス現代思想を自在に操りながら中国現代文学に関するすぐれた批評を展開している。張が中国の論壇で初めて脚光を浴びたのは『全球時代の文化認同』（グローバル時代の文化アイデンティティ、北京大学出版社、二〇〇五年）だが、その後は北京大学兼任教授として国際批評理論研究センターを立ち上げるなど、東アジアからの批評理論構築を目標に掲げて活発な研究教育活動を展開している。最近では同書の改訂版（二〇二二年）を含む三部作として『批判的文学史』（二〇二〇年）、『文化政治与中国道路』（文化政治と中国の道、二〇二二年）が上海人民出版社から刊行されている。

張旭東の功績は、ヨーロッパの批評理論（彼自身はヴァルター・ベンヤミンの翻訳を学生時代に手がけてもいる）を英語経由で中国と接続し、社会主義中国のモダニティに対する分析に応用していることだ。一方、中国の論壇に圧倒的な影響を与えているアメリカの思想として真っ先に挙げられるのはレオ・シュトラウスだろう。シュトラウスの重要性が中国の若い研究者に伝わったのは、一九八〇年代に張旭東にベンヤミンを薦めた劉小楓（中国人民大学）の影

響力が大きい。劉小楓は甘陽（清華大学）と共に西洋思想の翻訳と紹介に注力し、文化ブームの立役者となった。劉小楓は近現代思想の翻訳紹介のみならずバーゼル大学で神学を学んでおり、数多くの著作では古代ギリシャ哲学からニーチェ、ハイデガーに至るまで広範な紹介と批評を展開して、今日もなお新しい読者を引きつけている。

アメリカの思想状況から大きな影響を受けている学者としては、日本でも複数の訳著がある汪暉（清華大学）がいる。一九九〇年代初めにアメリカに滞在して当時のリベラル対コミュニタリアンの論争を間近に見たことが、彼の文学研究から思想史研究への大きな転換点となっている。アントニオ・グラムシなど西欧マルクス主義の影響が強いが、北米政治哲学の影響を見逃すべきではない。また汪暉は、日本の東洋史研究や批評理論（柄谷行人）を積極的に取り入れており、英語圏アカデミアにとっぴりと浸かっている中国の思想界において異彩を放っている。

今日の中国で学術思想界の中心を占めているのは、一九八〇年代に高等教育を受けた一九六〇〜七〇年代生まれの研究者たちである。彼らの中には張旭東のように中国の大学に籍を置いてはいないが国内の知識界・読書界と有機的に結びついている者も多く、また、欧米での豊富な留学経験をを経て国内の大学でポストを獲得する研究者も増えている。なかでも、シカゴ大学出身の李猛（北京大学）による『自然社会』（生活・読書・新知三聯書店、二〇一五年）

はトマス・ホッブズの自然状態論に対する良質な研究として中国国内で高く評価されている。

伝統への回帰

西洋思想への急速な開放と対になって進行するのは、伝統への回帰である。文化大革命中にひそかにカントの三批判書を英語で読み、その終結直後の一九七九年に『批判哲學的批判』を出版した李沢厚は一九八一年の『美的歷程』（美の歷程）によって美学的中国史とも言える歴史像を提出し、大きな反響を呼んだ。また、北京大学の哲学系教授が中心となった「中国文化書院」（一九八四年設立）はアカデミアと民間の両面における古典・伝統再評価の流れを築き、二一世紀に入ってから顕著になった儒学復興ブームの先駆となった。新世代の中国哲学研究を代表する楊立華（北京大学）はこうした流れの延長にあつて、学生の間でも絶大な人気を誇る。ただし、彼自身は学生時代にハイデガーを熟読するなど西洋哲学からの影響も大きく、例えば『一本与生生』（二元論と生生、生活・読書・新知三聯書店、二〇一八年）のように、西洋哲学からの翻訳語彙を応用することによって、新しい「中国語の哲学」を構築しようとする意図が明確である。同じような傾向をさらに推し進めているのが丁耘（復旦大学）であり、その『道体学引論』（華東師範大学出版社、二〇一九年）はハイデガーによりつつも再度中国哲学における中心概念である「道」の形而上学を構築

しようとした力作である。これは京都学派の哲学や、台湾や香港で発展した現代新儒家の哲学と相似したアプローチだとも言える。だが、丁耘自身は、最近十数年来の大陸新儒学（台湾や香港の現代新儒学と対比してこう呼ばれる）の担い手として革命伝統の哲学的考察を意識しており、相似性からめ取られない注意深い読解が求められるだろう。

西洋哲学の翻訳を紹介した中国哲学の再解釈は、宋代に朱熹らが仏教の思想を巧みに取り入れながらそれを儒学化していったのと類似しているだろう。また、清代考証学においても西洋由来の天文暦算学がやがて古典的な経学の語彙によって書き換えられていき、最終的には痕跡を留めぬほど中国化（土着化）していった。これらと同じような軌跡が、今日の中国哲学研究においても繰り返されていくのだろう。一方で、ローカルな智慧から出発して中国哲学の特殊性を明らかにすることによって、哲学の纏う普遍主義を相対化しようとする試みがある。これはともすれば東西文明二元論の枠組みの中で独善主義に陥りかねない土着化志向と、似ているようでやや異なる可能性を秘めている。なぜなら、そこには、グローバル化の現実を積極的に引き受けつつ、土着の側から既存の普遍主義に風穴を開け、「さまざまな普遍」の形成可能性を示すことで、「普遍化」の哲学的努力に中国の側から関与していこうとする傾向が見て取れるからだ。例えば、『做中国哲学』（中国哲学する、生活・読書・新知三聯書店、二〇一五年）の著者陳少明（中山大学）は、

クリフオード・ギアツの人類学的知見を取り入れているし、ハーヴァード大学で人類学を学んだ呉飛（北京大学）は経学の一部である礼学の再構築に取り組みながら、経済発展の弊害として今日の中国社会が直面する人倫の問題にも継続的にアプローチしている。

現代中国思想との対話をひらく

だが、こうした動向の中に近代以降に定まった西洋由来の普遍的ディスコースを中国の側から変容させていくに足るポテンシャルが具わっているとしても、それが実効性を持つためにはまだまだ時間が必要だ。なぜなら、巨大な人口を抱える中国の読者に向き合う彼らにとって、自らの研究や思想のコンテクストは自明なものであるのに比して、これらを背景の異なる他言語話者に伝えるためには、対象言語の読者に合わせた文脈化を行わなければならないからだ。つまり、彼らの試みが特殊主義に埋没するか否かは、域外との対話の積み重ねにかかっている。

そうした中で、対話的な関係の構築に成功しているのは、趙汀陽（中国社会科学院）の『天下の当代性』（天下の今日性、中信出版社、二〇一六年）だ。同書はすでに英・仏・独語に翻訳されており、「天下」たる概念によって近代的国際秩序を改めて世界政府を構想すべきであるという気宇壮大な主張は国際的な注目を集めている。趙汀陽の特徴は、西洋哲学の語彙を自家薬籠中の物としながら、同時に、中国

独自の歴史文化や哲学に関する専門的な議論には過度に踏み込まない点にある。独自のコンテクストの中で自足可能な中国のディスコースは、欧米の中国文学研究が地域研究の枠を出ない現実を強化するばかりだ。だが、趙汀陽の議論はそうした限界と無縁である。その結果、国内では誤解と批判を招き、国外では地域研究の無視するところとなる。だが、フランスでいち早くレジス・ドブレが対談を行っているように、地域研究の枠外で受け入れられることで趙汀陽の議論は普遍的な対話可能性に開かれている。早期の邦訳が最も望まれる一冊だ。

では欧米と異なり、中国哲学や中国文学、東洋史学などがいわゆる「シナ学」の延長にあって存続している日本ではどうか。一九三〇年代に竹内好や武田泰淳が東京帝国大学の旧態依然たる様相に反発して中国文学研究会を設立したところと事情はあまり変わらないのではなからうか。今日、中国文学の深甚な西洋化は旧来の研究方法によつては容易に届き得ないレベルに達している。武田泰淳はこうした

現実がすでに第二次世界大戦のころまでに兆していたことを感じ取っていたはずである。彼は中国戦線に赴いたときに、パール・バックの『大地』のような作品がなぜ日本人に書けないのかという嘆きを発している。このことは、エドガー・スノーらが毛沢東の革命に関する優れたルポルタージュを著した例や、ルイ・アルチュセールやアラン・バディウらが中国革命の理論を養分としながら哲学的思索を深めたことなどにも通じる。重厚な「シナ学」の伝統と地域研究的手法のはざまにあって、中国の近現代からアクチュアルな課題を引き出し、自らの思想へと高めていくアプローチは、日本においてかえって奪われてしまっている。状況を打開するためには、伝統的な中国文学とも地域研究とも異なる関心を引き起こしうる著作をより多く翻訳するほかないだろう。中国語を使って研究するわたしたちにとって、いまがだいじな試練の時である。

閻美芳 著

日本と中国の村落秩序の研究

―生活論からみた「村の公」―

村が消滅の危機にたたえられるなか、フィールド調査にもとづき分析。
花井みわ 著

「辺境」の文化複合とその変容

―東アジア文化圏を生きた中国朝鮮人―

20世紀の東アジア、日本、中国、南北朝鮮の交流を描く。

新刊案内

編著＝SGCIME 執筆者 土肥誠 菅原陽心 築田優 徐一睿
松尾秀雄 樋口均 クオックンエムリー 佐藤公俊 澤田貴之
清沢洋 河村一 田中史郎 田中裕之

菊判 600頁 定価 60800円

アジア経済の現状とグローバル資本主義

世界第二位の経済大国になった中国。民主主義を国是とし、自由主義経済体制をとるアメリカ。現代世界経済の分析を試みる。

A5判 218頁 定価 60200円

A5判 336頁 定価 12100円

御茶の水書房

〒113-0033 文京区本郷5-30-20
電話 03-5684-0751

日記史料と中国史

八百谷晃義 (慈済大学)

中国近現代史研究の分野において、歴史人物の日記は貫して重要な史料であった。特に近年の中国大陸では、日記史料の整理出版とそれを使用した研究が一種のブームになっっているようにみえる。このような研究上の流行は、学界のどのような動向を反映しているのだろうか。本稿では、筆者が専門とする清末史研究の動向を中心に紹介したい。

中国近現代史研究の趨勢の変化と日記史料

冒頭で述べたように、中国の近現代史を論じる際に日記を史料として使用することは、研究の出発当初から行われていた。金梁が『晚清四大日記』と呼ばれる翁同龢『翁文恭公日記』、李慈銘『越縵堂日記』、王闈運『湘綺樓日記』、葉昌熾『綠督廬日記』から六百余名の人物に関する記述を抜粋分類し、『近世人物志』として一九三四年に出版しているのは、日記が早くからその史料の価値を認められてい

た証拠といえる。この「四大日記」のうち、歴史研究の領域で最も高い価値を認められていたのは翁同龢の日記である。なぜなら翁同龢は戸部尚書など中央官庁の長官を歴任しただけでなく、日清戦争や戊戌変法の時期に軍機大臣と総理衙門大臣という要職を兼任し、なおかつ教育係を務めた経験から当時の皇帝・光緒帝と特殊な個人的関係をも有するという、一九世紀末の中央政局における最重要人物のひとつであったからである。実際に翁同龢の日記には政権中枢における政務処理や重大案件についての議論の状況などが相当詳細に記されており、北京の中国第一歴史檔案館や台北の故宮博物院、中央研究院などに所蔵される清末の未刊政治文書の利用がかなり進んだ今日においても、なお中枢の政治過程を復元するための重要史料たるを失わない。このように、政権中枢に位置した人物の残した日記が高い史料の価値を有することは、誰もが認めるところである。

う。例えば現在公開が進みつつある『蒋介石日記』の価値などは、改めて説明する必要もない。政治過程を知るために重要人物の日記を利用することは、今日においてもよく見られる史料の使用法である。しかし中国大陸における政策の転換とそれに伴う社会の変化は、それまで政治史偏重であった中国近現代史研究の動向や史料の整理出版のあり方にも大きな影響を及ぼし、日記史料の使用と出版にも新たな方向が生まれることになる。

そのうちのひとつは、清末に在外公館勤務などの理由で海外に赴いた官僚、知識人が残した日記の整理出版で、代表的な刊行物は鍾叔河が中心となって編纂され、湖南省の岳麓書社から一九八四〜八六年に第一輯一〇冊が出た走向世界叢書である。この叢書には、ヨーロッパに滞在した郭嵩燾や薛福成、また日本を訪れた王韜や黄遵憲などの日記や見聞録を中心に三五種の史料が収められている。「走向世界」、すなわち「世界へ向かう」というタイトルが示すように、五四の新文化運動以来の「第二の啓蒙」とも言われる一九八〇年代の雰囲気をよく伝える書籍だといえよう。走向世界叢書を代表とする外国滞在日記の整理出版は、外交史、中外交流史研究の史料状況を大きく変えることになった（走向世界叢書は二〇一七年に同じく岳麓書社から続編六種が出版された）。

そしてもうひとつ、本稿で重点的に紹介したいのが、中国史における社会史の興起による研究視角の変化と「新」

史料の発見、出版である。よく知られているように、社会史という領域はヨーロッパの学界で生まれたものだが、中国でも一九二〇〜三〇年代には研究が始まろうとしていた。しかし中華人民共和国成立以後、近代史研究の重点が階級闘争を主軸とする政治、経済史におかれ、また社会史自体が資産階級の学問と見做されたこともあり、中国大陸で社会史は独立した領域と認められなかった。このような停滞状況に変化が起きたのは、やはり一九八〇年代であった。

まず一九八〇年、中国社会科学院近代史研究所に文化史研究室（二〇一四年に社会史研究室と改称）が設立され、一九八六年に中国で初めての全国規模の社会史シンポジウムである「首届中国社会史学术研讨会」が開催された。この後、積極的に社会史研究の発展が図られ、今日において社会史は本国における近現代史研究の重要な一翼をなしている。

社会史の興起と日記の使用法の変化

社会史の興起は、中国史学における日記史料の使用のあり方にも変化をもたらした。まずはそれまで政治史や思想史、学術史的関心から使用されていた著名人物の日記に見える、社会生活や日常生活などに関する記述が目されるようになったことである。むしろ社会史が有力な領域になる以前にも、このような日記の使い方をした研究がなかったわけではない。例えば一九七〇年に香港中文大学から刊行された張徳昌『清季一個京官的生活』は、李慈銘『越縕

堂日記』を使用して経済面を中心に李慈銘の一八六三〜八九年における生活状況を示した研究で、今日における社会史、またその一枝としての日常生活史の先駆的業績といえる。このような研究は今日において珍しいものでなくなっており、例えば前述の翁同龢の日記により清末の北京における降水や黄砂、また季節による衣替えの状況を復元しようとした研究や、その他の高官の日記により当時の人々の持病やそれへの対応について論じた研究も現れている。

もうひとつは、決して著名とはいえない人物の残した日記の史料価値の「発見」である。当時における社会生活や日常生活の様子を知ろうとするならば、史料は必ずしも政府の高官や思想的、学術的エリートが残したものでなく、よく、むしろより「普通」の人々の記録にこそ価値がある、という場合もあるだろう。このような角度から日記史料を考える時、今日から見れば学界の趨勢の変化を示す象徴的出来事だったといえるのが、劉大鵬『退想齋日記』（喬志強標注、山西人民出版社、一九九〇年）の出版である。一八五七年に山西省太原県に生をうけた劉大鵬は、一九四二年に死去するまで幾度か旅行に出る以外は山西で生活した。彼は一八九〇年から五一年間日記を書き続け、現存する四一年分の日記から抜粋して成ったのがこの『退想齋日記』である。劉大鵬は清末には山西省諮議局議員を、中華民国期には太原県議会議長を務めた人物で、太原の在地社会において一定の地位を有する人物であったに違いないが、そ

れでも全国的にはもちろん、省のレベルでもほとんど政治的、文化的な影響力を持たずに一生を終えた人物である。

しかし今日の学界では、その日記は清末民国期の山西における社会変化や風俗を知るための、あるいはついに政治的、思想的エリートたり得なかつた郷居の知識人の社会や政治への見方を教えてくれる史料として非常に重視されている。例えば劉大鵬は、一八八四年に挙人となるも会試落第を繰り返すうちに科挙が廃止されてしまうという不運な経歴を持つが、このような人物による科挙の改革と最終的な廃止についての見方は、「近代化＝良いこと」という我々が今もかなりの程度前提としている価値観を疑うための格好の材料となっている。このように、『退想齋日記』の「発見」と出版は、政治史から社会史へという学界の流行の変化を端的に示すとともに、制度の近代化や革命の達成の価値を絶対視する歴史観を相対化しようとする潮流に対しても、重要な素材を提供した（『退想齋日記』は近く三晋出版社より完全な影印本が出版されるという）。

そして近年の中国大陸における日記史料の整理出版では、劉大鵬のような全国的には無名の人物が残した日記の刊行が大きな特色となっている。例えば、かつて翁同龢、王文韶、鄭孝胥といった政治的重要人物の日記を整理出版した中華書局の中国近代人物日記叢書では、二〇一八〜一九年に浙江省の温州市図書館が蔵する趙鈞、劉紹寬、符璋、林駿、張桐など、どれも全国的にはほぼ無名で、在地社会で

の地位もそれほど高くない人物の日記が出版されている。このような人物の日記が中国の人文系出版社を代表する中華書局から出版されたことは、むしろ重要人物の日記があらたに出そろってしまったことや、地方政府の後押しによる「町おこし」的な事情もあるとはいえ、やはり上述のような学界の趨勢と無関係ではない。

近年の日記史料の整理出版において無視できない貢献をなしているのが、江蘇省の鳳凰出版社（もと江蘇古籍出版社）が二〇一四年から毎年一輯十数種を出版し、本稿執筆の時点で第八輯まで刊行されている中国近現代稀見史料叢刊である。この叢刊は日記、書信、文集を中心に、一八四〇年から一九四九年までに生み出され、なおかつこれまで簡単には利用できなかったか、ほとんど知られていなかった史料を活用して出版することを目的とし、刊行史料のほぼ半数を日記が占めている。その中には例えば、第五輯の『袁昶日記』、第六輯の『江標日記』など著名な人物の日記や、戊戌変法関係の重要な情報が見えることで有名な第四輯の

『唐烜日記』など、特定の歴史事件との関係で広く知られる日記も含まれている。これらの日記はこれまででもその存在が知られながら、各地の図書館に稿本として所蔵されるか、国家図書館編『国家図書館蔵抄稿本日記選編』全六〇冊（国家図書館出版社、二〇一五年）など大型の影印本だけに収録されているなど、容易に利用できるテキストが存在しなかった。それがこの叢刊に収録されることにより、標点を施した比較的安価な単行本で出版されたことには大きな意味があり、特に外国の研究者である我々にとってはありがたいことである。そしてこのような著名な日記以外にも、下に改めて引く第一輯の『賀葆真日記』など、ほとんど無名の人物の日記が多く含まれていることも、この叢刊の大きな特徴である。

無名人物の日記と政治事件

本稿では中国大陸の学界を中心に、政治史偏重から社会史など新分野の興起という中国近現代史研究の趨勢の変化

高まるアイヌ文化へのまなざし！
ひと・もの・こころから読み解く
初めての総合辞典！

アイヌ文化史辞典

関根達人・菊池勇夫・手塚 薫・
北原モコットウナン編

約1000項目を図版を交えて解説。
15400円

◆推薦します◆

佐々木史郎
(国立アイヌ民族博物館館長)

野田サトル
(漫画家)



戦後沖縄生活史 事典 1945-1972

川平成雄・松田賀孝・新木順子編
激動の米軍統治下、生活に関わった
111の出来事を紹介。 8800円

太平洋戦争と 子どもたち

浅井春夫・川瀧 彰・平井美津子・
本庄 豊・水野喜代志編
疎開、沖縄戦、孤児生活など、47の
問いに答えて戦災の惨劇を記憶し
平和へ願いを託す。 2420円

歴代内閣・首相事典

【増補版】 鳥海 靖・季武嘉也編
伊藤博文から岸田文雄まで、101
代の内閣と64名の首相を網羅。
時事項目も増補！ 11000円

運慶

鎌倉幕府と三浦一族
横須賀美術館・神奈川県立金沢文庫編
運慶八百年遠忌を記念した、共同
特別展の公式図録。 2200円

東アジアの米軍再編

在韓米軍の戦後史
我部政明・豊田祐基子著 米国・韓
国・日本の関係から東アジアの安
全保障を考える。 2970円

無縁社会の葬儀と墓

死者との過去・現在・未来
山田慎也・土居 浩編 勃興する
直葬・孤立死…。衰退する伝統的
な死者儀礼の実態。 4180円

吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格は税込

について述べ、それが日記史料の使用や整理出版のあり方に与えた影響について紹介した。最後に無名の人物の日記が、政治史研究にも一定の貢献をなしていることについてひとつの事例を挙げ、締めくくりとした。

日清戦争の敗北により政権内外で改革への機運が高まっていた一八九五年末、康有為や梁啓超を中心とした在野の改革派人士は、北京と上海で強学会という士論の啓蒙と国家の富強を目指す団体を設立する。そのうち北京の強学会は実質的には強学書局として書籍出版を中心とした活動を行うが、御史楊崇伊が一八九六年一月に行った上奏で派閥を作り私利私欲を謀るものとして弾劾され、中央政府の命令で封鎖される。その翌月に御史胡孚宸より強学書局を官営とする提案が行われ、工部尚書孫家鼐が派遣されて官書局が成立した。強学書局が官営化される際、その性質に変化があったのかという問題については、従来よく知られた史料として、呉樵が官書局成立のほぼ一月後に汪康年に宛てた書信がある。ここで呉樵は、官書局が出世と金儲けを目的とする者の巢窟となり、まともな者はかえって近寄らなくなつた、と言っている（上海図書館編『汪康年師友書札（二）』上海古籍出版社、一九八六年、四七二～四七三頁）。しかし呉樵と汪康年はともに上海強学会の成員であり、むしろ北京の強学書局の支持者でもある。しかもこの書信の該当部分は両地の強学会が弾圧されたことへの不満を述べたもので、ほぼ利害関係者といえる人物がこのような文脈で

した発言をそのまま信じてよいものかどうか、筆者はいささか疑問を感じていた。このような疑問を大体において解決してくれたのが、中国近現代稀見史料叢刊第一輯に収録された『賀葆真日記』である。一八七八年に生まれた直隸武強県の人賀葆真は、一八九六年一月六日に『時務報』を読んだ感想を記し、『時務報』はかつて康有為が北京で刊行した『万国公報』、強学書局がそれを受け継いだ『中外紀聞』より優れていると述べた後、『官書局彙報』について、「強学会が封鎖された後、政府自ら経営する雑誌は忌諱するところが多く、『中外紀聞』に遠く及ばない」と述べている（三五頁）。つまり官書局による出版物の価値は変法運動期の代表的雑誌である『時務報』はもちろん、官書局の前身である強学書局が発行した『中外紀聞』にもはるかに及ばない、と言っているわけで、このような読者による率直な感想は、改革を期待する人物にとつて官書局がもはや魅力ないものになつていた事実を、より客観的に説明してくれる。強学会の成立と封鎖は戊戌変法の前奏となる重要な政治事件だが、このような事件の意味を考えるための貴重な情報を、この日記は提供してくれるのである。また『賀葆真日記』には新聞雑誌を積極的に読む様子がかかり詳細に記されている。上海を代表とする南方の都市を中心に多数発行された新しいメディアが、いかに北方の知識人の日常生活に浸透しつつあつたかも、その日記から読み取れる重要な情報といえよう。

日本における中国語作品の翻訳出版

松原理佳 (みすず書房編集部)

本稿では、編集者の立場から中国語作品の翻訳出版に取り組む筆者が、新型コロナウイルス感染症の発生によりブックフェアや現地書店の訪問が困難な中でどのようにして中国語圏の書籍の情報収集を行っているかを紹介する。

中国語作品の翻訳出版をめぐる困難

本題に入る前にまず、日本で中国語作品の翻訳出版を行うことに伴ういくつかの困難に触れておきたい。

第一に、中国語圏の出版情報は自力で収集しなければならないことが挙げられる。日本では通常、版權エージェントが出版社に対し日常的に海外書の近刊情報を提供している。その際、書評、受賞歴等の原書の評価や他言語版權の取引状況、著者の他作品の邦訳状況といった包括的な情報が得られるのもちろんのこと、権利関係の確認から検印用原稿の手配、権利者との交渉、契約までの一連の版權輸

入業務がスムーズに代行されるシステムが確立している。

しかし、英語圏をはじめとする欧米からの版權輸入のニーズが安定している一方で、中国語圏の書籍についてはニーズが小さいため、これらの地域の出版情報をフォローし日本の出版社に作品を売り込むエージェントはほばない。

さらに言えば、版權輸入の需要が不安定であるということとは、書籍翻訳の需要もまた限定的であり、書籍翻訳者の裾野が広がりづらい環境であることを意味する。これが第二の困難である。もちろん専門書については関連分野の研究者に翻訳を依頼することができ、企画段階においても研究者の協力を得ることが可能だろう。しかしノンフィクションやエッセイなどの一般書にまで検討の対象を広げ、継続的に翻訳書を出していくとすれば、他言語同様に専門的翻訳者の存在が不可欠である。中国語通訳市場において需要が高いのは会議通訳やビジネス翻訳であるが、書籍

翻訳はそのいずれとも勝手が異なる上、一般的な翻訳に比べて原稿を完成させるまでにより多くの時間と手間を要する。また翻訳者からすれば、出版社に中国語書籍の翻訳企画を持ち込んだところでどれほど実現可能性があるのか、どれほどの収入が得られるのかは不確かであり、他言語ほどには訳者からの企画提案が期待できない状況がある。

このような環境の下で中国語作品の翻訳出版を行うとなると、出版社の内部にいる編集者自身がある程度主導的に企画の成立までを進め、書籍翻訳未経験の訳者と協力して互いにノウハウを身に着けていくことが必要となる。さらに、これまで中国語圏を扱う本のジャンルやレベルがある程度固定化されていたことを念頭に、新たな読者層を開拓していくことも大切だろう。

中国と台湾の出版情報

次に、中国と台湾について、オンラインでアクセスできる出版情報を紹介しよう。

中国については、これまで毎年八月に開催される中国最大規模のブックフェア「北京国際図書博覧会」に合わせて訪中し、現地出版社とのミーティングを行うほか、会場や現地書店で実際に本を見て探すというのが通例であった。書籍自体はもとより原書版元や通販を通して入手可能だが、さまざまな作品を一挙に見渡せるリアル書店へ足を運ぶこととの意義は大きかった。コロナ以後はこれが完全にオンラ

インに切り替わった。

オンラインの情報チャネルとしては、第一にウェイシン 微信 (WeChat) の出版社・工作室の公式アカウントが挙げられる。中国の出版業界のオンラインでの情報発信は日本に比べて格段に活発で、内容も情報量も充実している。これらの情報の発信は中国語でなされ、基本的に自分が関心のあるアカウントをフォローする形となる。公式アカウント上では新刊情報が発信され、著訳者や担当編集者による内容紹介や関連書紹介のほか、著者による講演動画の配信がなされることもある。また既刊書についても、中国では比較的短期の出版契約を結び、数年後には新版ないし増補版の形で出し直すというケースが多々あることから、中長期的に読者を獲得している作品については再版の情報を通してその存在を知ることが少なくない。

第二の情報源として挙げられるのが書評、出版賞であるが、これも基本的にはオンラインでアクセス可能な情報である。中国の出版賞で主要なものには、国家図書館主催の「天津図書賞」、中国図書評論学会主催の「中国好书」ほか、人民文学賞、茅盾文学賞、魯迅文学賞等の各種文学賞が挙げられるが、これも微信で主催団体もしくは業界アカウント（「出版人雑誌」「做書」等）、書評アカウント（「新京報書評週刊」「中華読書報」「文匯讀書週報」等）をフォローしていればタイムリーに情報が得られる。そのほか、レビューサイト「豆瓣ドゥバン (Douban)」では、ユーザーのレビュー件数

知泉書館

中国思想史

A. チャン／志野好伸・中島隆博・廣瀬玲子訳 ヨーロッパのスタンダードな中国哲学の入門書を明快な訳文で提供した待望書 菊/712p/7500円

中国思想史論攷

宗教のある風景

西脇常記 儒仏道だけでなくキリスト教も含めた宗教が中国社会に与えた少なからぬ影響を考察 A5/280p/4500円

勢 効力の歴史

中国文化横断

F. ジュリアン／中島隆博訳 多義的に用いられる「勢」を鍵概念に中国文化の実相へ多面的に迫る A5/352p/4600円

欧陽脩

11世紀のユマニスト

(知泉学術叢書17)

劉子健／小林義廣訳 欧陽脩の人生と著作活動を戦後の米国内で活躍した歴史家が生き生き描く 新書/376p/4500円

戴震と中国近代哲学

漢学から哲学へ

石井 剛 近代哲学の萌芽として、20世紀中国で18世紀の戴震の哲学が注目された訳を探る A5/480p/6800円

中国演劇史論

田仲一成 発生から民国期までの展開を解明した、第一人者によるわが国で初の中国演劇の通史 菊/440p/5400円

東京都文京区本郷 1-13-2 (税別)
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166
<http://www.chisen.co.jp>

や評価に基づき、年度ごとに分野別ランキングを発表している。これらの情報も本探しの一指標となるだろう。^③ただし、出版賞にせよ、ランキングにせよ、あるいは版元発信の書籍情報にせよ、その地域である作品が出版され、評価される背景には往々にして独自の文脈があることには注意を払うべきだろう。

台湾についても、従来は毎年二月頃に「台北国際書展」が開催されていた(今年は六月に三年ぶりに会場開催された)。大物作家の講演や版權契約の調印式などが盛大に催されるセレモニー的要素の強い北京ブックフェアに比べて、台北ブックフェアは書籍の内容に踏み込んだ講演や対談が多く、版權輸入側にとっても有用な学びの機会となっていた。

台湾の出版情報は、各出版社がフェイスブックで発信する情報が最も充実しているように思われる。版元を限定せず広く新刊情報を得るのであれば、書籍通販サイトの「誠品線上」「博客来」などを見るのがよいだろう。話題書については著者や担当編集者のインタビューが掲載されるこ

ともあり、「誠品線上」では選書委員が月ごとに選出する注目が「誠品選書」として紹介される。^④近年、日本では台湾の作品が数多く翻訳出版され、市場が形成されつつある。その背景に「太台本屋」のような版權輸入を後押しするエージェントや熱心な訳者の存在があるのは確かだが、台湾文化部(日本の文科省に相当)が翻訳出版助成によって台湾作品の海外への輸出を推進していることも大きな要因であろう。^⑤中国にも政府による翻訳出版助成(国家社科基金中華學術外訳プロジェクト)があるものの、文化部助成に比べて申請のハードルが高く、台湾が一般書を含め広く現代の作品を対象としているのに対して、中国の外訳プロジェクトでは学術書、とりわけ中古典の版權輸出を促進する意図が見てとれる。^⑥

中国語圏と日本

以上でオンラインの情報源を概観したが、むしろ問題となるのはそこからどのように作品を選び、いかにして翻訳

出版を実現するからである。これについては一概に論じることができないため、ここでは筆者が日頃重視している要素を述べたい。

筆者が企画立案において作品の評価と同等に意識しているのは、翻訳された作品を読む側、すなわち日本の読者の認識にかかわる問題である。一口に中国語圏と言っても、中国、台湾、香港ではそれぞれ社会状況が異なる。同様に、日本社会が各地域に対して持つイメージや知見の程度には差があり、世代による時代経験の違いも軽視できない。さらに言えば、そうした認識は、各々の地域が実態としてどうであるかという問題とは別の位相で、つまりこれらの地域に対するステレオタイプや利害関係の影響を受けつつ形成される部分がある。翻訳書がそうした言論空間の中に置かれたとき、どのような反響なり変化なりを生み出しているのか。企画者が「見る側」の認識の有りに意識的に向き合うことが、商業出版として持続的に本を刊行していく上でも重要な原動力になるように思われるのだ。

そもそも筆者が中国語作品の翻訳出版に取り組むのは、これらの地域に対する日本社会の認識を複層化し、同時代を生きる他者として相手を知る手立てを提供したいという思いがあるからである。そのために多様な作品の継続的刊行が必要となるのであり、継続的刊行のためにはその基盤となる市場を耕し広げていく努力が不可欠である。その最たるものが読者の開拓であるが、この点では、本来的な読

者に限らず、潜在読者をも包摂しうる可能性に開けた本に仕上げるのが重要であると考えている。特に、訳文の可読性や作品理解を助ける工夫は、ある程度的前提知識が共有されている欧米の作品に比べてとりわけ重視すべきだろう。

さて、最後に、今日の中華圏の状況を見渡したときに、地域的に近接した日本の出版がどのような役割を担いようかについて試論を提示し、結びとしたい。

本稿では香港には触れなかったが、かつて中国語圏において最も自由な出版環境と目されていた香港が、市場規模の小ささという従来の課題に加え、国家安全維持法の施行によって今後どう変化を遂げていくのかは注視が必要である（台湾の出版社がその受け皿となる動きがすでに現れている）。

一方の中国においても、出版業が一見活況を呈するようでありながら、明文化されない規制によって国内での出版が影響を受けたり、海外への版權販売にまで波及したりするケースに、筆者自身が実際に遭遇している。例えば、この間の政府による防疫対策の下で、個人の権利や情報公開に関し社会的な議論が起こったことは注目値するが、そうした動きが国内で書籍（輸入可能なパッケージ）の形でまとめられることは考えづらい。

こうした状況に、日本の出版はどう向き合うべきだろうか。いまだ模索中であるが、日本の出版側が単に「翻訳し出す」という従来のな形にとどまらず、各地域の著者や

出版人と連携して可能性を探る余地はあるように思う。今後、互いに課題を共有しともに取り組むという意識のもと、出版を手段とした有機的つながりを築いていけたらと考えている。

注

(1) 「工作室」とは一般的に図書の企画・編集・制作・販売促進(翻訳書の場合は版權取得を含む)を行う民営の出版社を指す。民営出版社はISBN発行申請権を持たないため、申請権のある国営出版社と共同出版という形でのみ作品を出版することができる。奥付に「策劃(企画)」「出品方」などとクレジットされているものがこれにあたる。

(2) これとは別に、書籍の内容を講義形式に再編集し動画で配信するサービスとして、羅編思維の提供する「得到(iget)」(<https://www.igetget.com/>)、三聯書店発行の雑誌「三聯生活週刊」の提供する「三聯中読」(<https://www.threeck.com.cn/course>)がある。専門書のハードルを下げ、読者層を拡大する取り組みとして注目に値する。(3) 「豆瓣」の二〇二一年度ランキングは下記を参照。https://book.douban.com/annual/2021?source=book_navigation

(4) 「誠品選書」 <https://www.eslite.com/eslite-choice-books>

(5) 台湾文化部の翻訳出版助成については BOOKS FROM TAIWAN (<https://booksfromtaiwan.tw/>) を参照。

なお、審査においては、台湾文化部の主催する「金鼎賞」の受賞が優先的に助成対象とされる。台湾の出版賞はそのほかに、台北ブックフェア主催の「書展大賞」Openbook 主催の「Openbook 好書獎」、文学賞として国立台湾文学館主催の「台湾文学賞金典賞」、新聞社である聯合報らが主催する「聯合報文學賞」などがある。

(6) 「国家社科基金中華學術外訳項目」については下記を参照。
<http://www.nopgs.gov.cn/h1/2021/0918/431031-32231283.html>
別紙書類3は推薦図書リストである。中国に限らず、中華圏の中古典には未翻訳のものが多く、今後の邦訳出版が期待される。

憲法の土壌を培養する

蟻川恒正・木庭 顕・樋口陽一(編著) ◎定価550円税込

憲法について、
より根本的な地平から大きく、
そして厳密に考えるために。

現代日本社会に、「憲法の土壌はあるか。法律時報誌における同名の鼎談企画を基点に、「知」の議論を基層から掘り下げる。



日本の知、どこへ

どつすれば
大学と科学研究の凋落を
止められるか?

共同通信社「日本の知、どこへ」取材班
日本の知が危機的な状況にある。過度の選択と集中で大学の研究費が不足し、多くの現場が疲弊しているからだ。その処方箋を探る。 ◎定価1,000円税込



感染症流行を 読み解く数理



野真中野 新司

西浦博著 感染症流行の仕組みを数式で説明！
小林鉄郎+安齋麻美+合原一幸+ナタリー・リントン 監修
COVID-19を経て注目を集める、感染症流行にまつわる数理モデルの基礎について、さまざまな具体例に基づきわかりやすく紹介。 ◎定価550円税込

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
☎03-3987-8621 <https://www.nippyo.co.jp/>

大学出版部ニュース

表示価格は税込です。

大学出版部協会・活動報告

五月二一日(金) 一三時三〇分

第一八期(二〇二二年度)

定時社員総会/第一回 理事会

五月二六日(木)

シンポジウム(対面・オンライン)

『翻訳(ひるがえってやくす)』

第一部

『翻訳という仕事、翻訳家という生き方』

講師・金原瑞人(法政大学教授)

『翻訳について考えたこと』

講師・亀山郁夫(名古屋外国語大学学

長)

第二部・座談会/講師・金原瑞人/亀山

郁夫/エリス俊子・大岩昌子(名古屋外

国語大学教授)/司会・川端博(名古屋

外国語大学出版会)

※於・名古屋外国語大学名駅キャンパ

ス/共催・名古屋外国語大学出版

会・W L A C

六月一〇日(金) 第一回 営業部会

六月一六日(木) 第一回 編集部会

六月二四日(金) 第二回 理事会

七月一五日(金) 第二回 営業部会

七月二九日(金) 第三回 理事会

(定時社員総会・理事会・部会はZOOM)

北海道大学出版会

▼権錫永著『からまりあい重なりあう歴史―植民地朝鮮の文化の力学』(四六判・

三七六頁・三四〇〇円) 柳宗悦らも巻込

み複雑に織りなされた植民地の文化の力

学について朝鮮の人々の思いを描き、「民

族の物語」からの転回を見透す。

▼岩下明裕編著『北東アジアの地政治―

米中日口のパワーゲームを超えて』(A

5判・三一〇頁・三八五〇円) 地域協力が

が後景に退き特に海域での緊張が高まる

北東アジアを、地政治(geo-politics)の

重層的な視点で読み解く。

▼金昌震・韓然善・趙恵真編著『アンビ

シャス韓国語―入門編』(B5判・一一四

頁・一九八〇円) 初めて韓国語を学ぶ人

向け、文字や発音の基礎を学び簡単な日

常会話のトレーニングができる、シンプ

ルかつ機能的なテキスト。

▼田村理著『人権論の光と影―環大西洋

革命期リヴァールの奴隷解放論争』(A

5判・二三八頁・六三八〇円) 奴隷貿易

で繁栄したリヴァールに吹き荒れる奴

隷解放運動の嵐。その人権論の理念と帝

国意識との関連を主張する野心作。

弘前大学出版会

▼平井太郎編著『SDGsを足許から考えかたちにする』（A5判・一九〇頁・一六五〇円）今、地域の現場でも話題となることが多い「SDGs」。国連が世界全体で共有すべく掲げた「持続可能な開発目標」のことだ。だが、それだけにそれぞれの地域の現場で、どう受け止めてよいか、わかりにくいのが実情だ。どこから手を付けたらよいか。何が肝なのか。そうした悩みを抱える現場のみなさんに本書を届けたい。

▼青森県スポーツドクターの会・弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座編集／青森県高等学校野球連盟監修『野球検診手帳』（A5判・五八頁・四九五円）スポーツ医学の専門家が、成長期の野球選手に必要な医学的な情報を多岐に解説。成長期に生じる肘の障害は、検診で早期に発見し対処すれば、手術をせずに治すこともできる。また、本書は検診の記録簿にもなっており、選手・指導者・医療機関の間で正しい情報のスムーズな共有にも役立つ。選手自身が自分の身体を守り、楽しく安全に野球が続けられるよう、本書を活用してほしい。

東北大学出版会

▼吉葉恭行・米澤晋彦著『斎藤報恩会と東北帝国大学―財団設立の理念と学術研究助成の実際』（A5判・二四四頁・三五二〇円）八木秀次、本多光太郎ら数々の研究者による卓越した業績を支えるなど、大正末期から昭和戦前期の東北帝国大学の学術研究に多大な貢献を果たした財団法人斎藤報恩会。財団設立の思想的背景や学術研究助成の実績、東北帝国大学の研究者たちのかかわりなどをおし、その実像と歴史的作用を貴重な一次史料の解説により丁寧に描き出す。

▼加藤道代・一條玲香編著『東日本大震災後の子ども支援 震災子ども支援室（Sーチル）の10年』（A5判・一八二頁・二四二〇円）東日本大震災後の二〇一一年度から二〇二〇年度まで東北大学大学院教育学研究科に設置された震災子ども支援室（Sーチル）の一〇年間の記録。相談支援、学習支援、里親サロンなどの当事者支援事業、専門職や支援者に対する支援事業、そして調査・研究事業を取り上げ、その成果と課題について検討する。震災支援の長期的記録と今後の支援活動の礎となる一書。

流通経済大学出版会

▼林克彦著『現代物流産業論―ロジスティクス・プラットフォーム革新』（四六判・三〇八頁・二五三〇円）労働力不足の深刻化にコロナ禍が重なり、厳しい状況に置かれている現代の物流産業。その危機を打破するためには何が重要か。物流企業の動向を詳説し、構造変化を分析した一冊。



▼尹敬勲著『第4次産業革命と社会教育』（A5判・一八六頁・三三〇〇円）第4次産業革命の余波で機械と人の雇用をめぐる戦いが本格化している。労働者が生き残るために必要な「変化を先取る」学びとは。



聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・重安智子・井口厚子・関口明子著『教職実践演習―幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために』（B5判・一四〇頁・一七六〇円）
幼児教育に携わるために学んできた総まとめとして、いじめ、食育、特別支援教育や、幼・小連携、家庭や地域との連携の大切さを具体例を挙げて説明。総合的な実践的指導力の基礎を修得できる一冊。
▼宇佐美博子・河村久・神田由紀・黒須利夫・小林芳枝・長橋雅俊・松井孝夫・八木正一著『教職実践演習』（B5判・一四六頁・一七六〇円）中学校・高等学校教諭を目指す方に向け、教職課程の振り返りから生徒指導要録・通知表の記入の仕方まで解説。教職の魅力が満載。
▼聖徳大学特別支援教育研究室編『一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなを進める特別支援』改訂2版（A5判・二四九頁・一七六〇円）初学者のための特別支援教育本。コンパクトなハンドサイズに、全障害について、子どもの理解と指導・支援に必要な基礎的知識を盛り込んだ一冊。

慶應義塾大学出版会

▼姜兌坑著『福沢諭吉の初期思想』（A5判・二〇八頁・四九五〇円）幕末〜明治初年、翻訳者としての福沢諭吉は何をどのように訳し、何を訳さなかったのか。当時、福沢が読んだ西洋の書籍と、それを翻訳して刊行した書籍の文章と、それを対照させ、そこにあらわれる翻訳思想、西洋近代知の受容・変容過程を読み解く。
▼平野裕之著『高齢者向け民間住宅の論点と解釈』（A5判・三五二頁・四一八〇円）有料老人ホーム、サ高住、シニア向け分譲マンション。いずれの契約関係についてもこの分野の民事特別法はない。超高齢化が進む現代社会において、「高齢者福祉」の理念を実現する「終の棲家」の契約は、どうあるべきなのか？
▼佐藤文香著『女性兵士という難問―ジエンダーから問う戦争・軍隊の社会学』（四六判・三三〇頁・二六四〇円）女性兵士は男女平等の象徴か？戦争や軍隊は、どのような男性や女性によって担われ、いかなる加害／被害関係を生起させているのか。既存のジエンダー秩序を自明のものとすることなく、批判的に検証する。

専修大学出版局

▼トマス・バーガー著／住谷一彦・鈴木章俊訳『マックス・ヴェーバーの概念形成論 増補版―歴史・法則・理念型』（A5判・四一六頁・五二八〇円）ヴェーバーの「認識論」の分析を基礎に、その「方法論」「社会学」を解説する本書は、批判的合理主義、実証主義、科学哲学、分析哲学からヴェーバー方法論を再解釈する高度なマックス・ヴェーバー入門書であり、かつ批判的入門という役割をも果たすヴェーバー分析書である。
▼朝倉健男著『主要国4中央銀行 金融政策の比較分析―歴史・制度・将来展望』（A5判・二七二頁・三〇八〇円）4中央銀行によるマネタリー政策とブルードレンス政策においてみられる相違点を、中央銀行の成り立ち、組織の仕組み、各国・地域が置かれた金融・経済環境の違いなどの面から考察する。新型コロナ危機対応を踏まえた政策についても、それぞれに整理して将来の展望を行う。

玉川大学出版部

▼西野毅朗著『日本のゼミナル教育』(A5判・二二四頁・四四〇〇円) 古くから重要視されながらも、あまり実態が把握されてこなかった日本のゼミナル教育の特徴を多様な角度から分析。歴史的経緯、現状と課題、さらに学生の学びの様子と社会とのつながり等、歴史的・量的・質的研究アプローチを用いて明らかにする。ゼミのイメージを具体化し、今後のより良い実践へつなげることを目指す。

▼鳥越文蔵・内山美樹子監修『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集(第七期)』(四六判・一三六四頁・三〇八〇〇円) 現在未翻刻の義太夫節浄瑠璃作品を翻刻活字化するシリーズ第七弾。六期までに続き、無形文化遺産である人形浄瑠璃文楽の原作一〇作を底本に忠実に再現。作品の理解を深める「解題」、上演・翻刻状況を知ら「年表」などを各巻末に付す。浄瑠璃は、近世庶民の倫理観、人生観を構築していく上での必読書だった――。函入りセット組み、分売不可。

中央大学出版部

▼清水克洋著『オーギュスト・クーフェ考』(A5判・二二二頁・二五三〇円) 社会主義崩壊以降、再考察が進む十九世紀末フランス労働組合運動に関して、改良主義者A・クーフェと革命主義者J・アルマヌの書籍労連における対立を、組合機関紙の詳細な分析を通じて考察。

▼関野満夫編著『現代地方財政の諸相』(A5判・二〇四頁・二六四〇円) 現代地方財政の現状と課題を多面的に分析。日本地方財政制度の戦前・戦後の関係、地方法人二税の東京集中の経済的背景、自治体財政の債務負担行為・継続費の課題、市町村財政の連結決算の現状、水道事業の官民連携の評価を分析する。

▼山科満編著『キャンパスにおける発達障害学生支援の新たな展開』(A5判・二〇八頁・二四二〇円) 中央大学の各学部事務室に配置された心理専門職は、全く新しい学生支援システムにより成果を挙げつつある。大学において、学内組織の調整役から実際の支援に携わる専門職員まで、それぞれの持ち場で奮闘した教員・心理職・精神科医らによる、システム構築過程と臨床経験の記録である。

東京大学出版会

▼中川武編『世界建築史ノート―「人類の夢」を巡歴する』(A5判・二四八頁・四一八〇円) 世界13の地域の建築研究者が、偏愛する建築史的に重要な都市・建築を精選し、歴史的価値や建築史的特徴を熱く語る。人類五〇〇〇年の建築入門。

▼小池伸介・佐藤淳・佐々木基樹・江成広斗著『哺乳類学』(A5判・四一六頁・四四〇〇円) 哺乳類について学ぶすべての人たちへ――進化、形態、生態、そして保全をテーマに最新の知見を踏まえ基礎から応用まで体系化。決定版教科書。

▼劉傑・中村元哉著『超大国・中国のゆくえ1 文明観と歴史認識』(四六判・二四〇頁・三八五〇円) 経済成長に自信を深め攻勢を強める中国の行く末を、その文明観と歴史認識から読み解く。シリーズ全5巻完結。

▼池内恵・宇山智彦・川島真・小泉悠・鈴木一人・鶴岡路人・森聡著『Up plus ウクライナ戦争と世界のゆくえ』(A5判・一三二頁・一八七〇円) 衝撃を与えたロシアのウクライナ侵攻とその後の世界的情勢を、一級の執筆陣が広く深く分析し、激動する現在への見通しを示す。

東京電機大学出版局

▼東京電機大学編『サイエンス探究シリーズ 偉人たちの挑戦(1) 数学・天文学・地学編』(A5判・二五八頁・三〇八〇円) 科学で偉大な発見・発明をした偉人の業績と生涯を分野別に紹介するシリーズ。会話調の平易な語りと多数のイラストでわかりやすい内容となっている。さらに、偉人のスピリットを受け継ぐ大
学研究者等からのメッセージ、読書案内を紹介している。

1巻目の登場人物は、ブレイズ・パスカル、関孝和、レオンハルト・オイラー、カール・フリードリッヒ・ガウス、ソーニャ・コワレフスカヤ、シュリニヴァーサー・ラマヌジャン、アラン・チューリング、ニコラウス・コペルニクス、ガリレオ・ガリレイ、ヨハネス・ケプラー、エドモンド・ハレー、ウィリアム・ハーシエル、伊能忠敬、ウィリアム・スミスなど、総勢17人。



法政大学出版局

▼T・ベグ著／濱田正美訳『征服の父メフメト二世記』(A5判・五〇八頁・七七〇〇円) 栄華を極めた大都市コンスタンティノープルを攻略し、東ローマ帝国を滅亡させたオスマン帝国のスルタン、メフメト二世の一代記。

▼S・カヴェル著／石原陽一郎訳『幸福の追求―ハリウッドの再婚喜劇』(四六判・四五八頁・四七三〇円) 恐慌期から大戦期にかけて米国で撮られた七本の映画が、新しい女性の創造に関わる、再婚の喜劇だったのはなぜか。映画論の名著。

▼J・デリダ著／谷口博史訳『エクリチユールと差異(改訳版)』(四六判・六五四頁・五九四〇円) 主体と他者、言語と表象、存在と歴史をめぐる哲学的思考を根底から書き換えた名著。全面的に訳文を改訂、さらに読みやすくなった新版。

▼加藤泰史・後藤玲子編『尊厳と生存』(A5判・四九四頁・五七二〇円) 限られた医療資源とトリアージ、ワクチンの分配と格差、先端医療、ゲノム編集、自己決定、出生前・着床前診断、終末期医療・ケア、文学、政治など多様な領域の喫緊の問題として「尊厳」を論じる。

武蔵野大学出版会

▼欒殿武・柴田幹夫編著『日華学堂とその時代―中国人留学生研究の新しい地平』(A5判・五五二頁・四六二〇円) 日華学堂に関する日誌を基にして、清末の留日学生史の一端を解説。日華学堂の学生たちを通じて、留学生派遣の背景、学堂の教育と経営、学生たちの生活、留学中の勉強と活躍、帰国後の活動などを紹介したほか、高楠順次郎を始めとする教員たちの献身的な教育活動を、豊富な資料と共に明らかにしている。



▼ケネス・タナカ著『目覚めるアメリカ仏教―現代仏教の新しい未来像』(四六判・二七二頁・二五三〇円) 現在、欧米では仏教が伸長し続けている。仏教は西洋の壁を超え、「東洋」に限るものではなくなったのだ。アメリカ仏教の歴史や現状、特色と背景、代表的な人物や組織などから、その意義や影響力を解説する。

武蔵野美術大学出版局

▼板屋緑著『ローマに 幾つもの中心に 行んで』（B5判変型・一九二頁・二八六〇円）古代ローマ人が生み出した堅牢な《ローマン・コンクリート》による遺構を基礎に、様々な時代の要素を重ね、繋ぎ合わせるようにして更新、発展を続ける都市ローマ。そこかしこに遺された人々の二千年以上にわたる幸せを探索する行為の跡をたどりながら、特有の空間の仕組み《十文字交差軸性》を手がかりに、新たな視点でローマの奇跡を読み解く。ひと味違うローマ逍遥。著者による写真、スケッチをカラーで多数掲載。

▼伊東敦著『未来の教師と考える特別活動論』（A5判・三三〇頁・二五三〇円）教育課程において、他者との関係づくり、進路の選択、心身の健康、ボランティア活動など、教科とは異なる特殊な分野を担い、児童生徒が自立して生きていくための発達を促す支援、指導の要とされる「特別活動」。それは教科書や副読本、特定の手引きもない教師の力量が端的に表れる領域である。教師になる前に学び、考えておきたい「特別活動」の過去・現在・未来。新学習指導要領完全対応。

明星大学出版部

▼須藤康介著『教育問題の「常識」を問い直す―いじめ・不登校から家族・学歴まで 第2版』（四六判・二七〇頁・一九八〇円）本書は、様々な理論やデータを紹介し、世間一般で語られている教育問題のどれが本場で、どれが誤解なのかを検討して行く。そして、本当たとしたりその解決方法、誤解だとしたら誤解が生じている理由を考える。



▼樋口修資著『教職志望者のための教育法の基礎』（A5判・四九八頁・三五二〇円）本書は最新の教育法令の改正動向等を踏まえて、二〇一五年初出の『最新教育法の基礎』を大幅改定し、教員及び教員志願者が理解しておくべき最新の教育法規の基礎的・基本的知識を全十六章にわたってまとめたもの。

早稲田大学出版部

▼渡邊義浩著『大隈重信と早稲田大学』（新書版・二九四頁・九〇〇円）早稲田大学の創立者で知られる、大隈重信の没後一〇〇年。「成功より失敗が多い。失敗に落胆しなされる」と卒業生に語った言葉は名言として語り継がれている。その過去・現在・未来を本書は照射する。

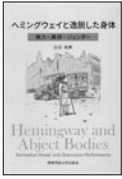
▼早稲田大学出版部編『平和宣言』全文を読む『ヒロシマの祈り』（新書判・二四八頁・九〇〇円）第一回平和宣言から75年が過ぎた。核兵器の削減は進まない。平和宣言全文に加え、歴代3市長のロングインタビューを収めた本書は、核廃絶と世界平和実現の道筋を示す。

▼藤井省三著『村上春樹と魯迅そして中国』（新書判・二六〇頁・九〇〇円）村上春樹の文学世界を読み解く「記号」は中国であると考える著者が、「猫好きの村上春樹」と「猫嫌いで小鼠好きの魯迅」を照らし合わせることで、二人の文学世界を掘り下げる。村上文学の深淵に迫る！

関東学院大学出版会

▼古谷裕美著『ヘミングウェイと逸脱した身体 権力・棄却・ジェンダー』（四六判・二一四頁・二四二〇円）なぜ、ヘミングウェイの描く妊婦は次々と死んでいくのか。数多くの傷病者を描き、何を表現したかったのか。社会不安や権力への反発を投影する圧倒的な負の存在に着目し、物語の再読を試みる。

序章／第一章「日はまた昇る」における語り・視覚性・客体化／第二章「キリマンジャロの雪」における腐敗・去勢・死／第三章「神よ陽気に殿方を慰わしめたまえ」の切断された身体／第四章「インディアン・キャンプ」における先住民妊婦の身体／第五章「武器よさらば」における医学と権力／第六章「アルプスの牧歌」における言説とセクシュアリティの構築／第七章病んだ身体―「蝶々と戦車」における空間・身体・死者の魂／第八章「エデンの園」における身体変容／結論



名古屋大学出版会

▼ロバート・スキデルスキー著／鍋島直樹訳『経済学のどこが問題なのか』（A5判・二八八頁・三九六〇円）モヤモヤしている人のために……。科学の地位を得るために、経済学は様々な数学やモデルを使ってきた。それらは本当に有効なのか。スタンダードな経済学の考え方を再検討し、今後に向けての処方箋を提示。

▼東栄一郎著／飯島真里子他訳『帝国のフロンティアをもとめて―日本人の環太平洋移動と入植者植民地主義』（A5判・四三〇頁・五九四〇円）移民から「有色人種の帝国」へ……。各地の日本人移民の相互関係を初めて解明、見過ごされてきたグローバルな帝国の連鎖を浮かび上がらせる。待望の邦訳。

▼呉羽真・伊勢田哲治編『宇宙開発をみんなで議論しよう』（A5判・二五六頁・二九七〇円）有人宇宙探査の新たな計画、商業化、軍事化、新興国の台頭……近年、宇宙開発は大きく転換しつつある。市民がそこに関わる必要性をわかりやすく説き、そのための基礎知識や科学技術コミュニケーションの手法、議論のスキルを提供する初めての本。

名古屋外国語大学出版会

▼根無一信著『ネム船長の哲学航海記 I ソクラテスからの質問「価値は人それぞれ」でいいのか』（A5判・一八六頁・一七六〇円）初めて哲学を学ぶ人のための画期的な入門書。すべての人間を感動させる歌はあるのか、美味しいものが美味しいのはなぜ？……わかりやすい問いかけから始まり、次々に「常識」がくつがえされていく。〈人それぞれ〉の〈相對主義〉でジェノサイドや殺人、戦争が防げるか……。ものごとの真の原因、真の理由を追求し続け、「よりよく生きること」を求め続けた古代ギリシャのソクラテスからの呼びかけに、我々は今こそ向き合いたい。新進気鋭の人气哲学研究者が初めて書き下ろす、楽しく読める〈生きるための〉哲学。八月三二日刊行。

▼浅野輝子・吉見かおる他編『現代をどう伝えるか 通訳ワークブック②』（B5判・二三〇頁・二二〇〇円、仮題・予価）二〇〇七年以来、名古屋外大で毎年開催の「全国学生通訳コンテスト」そのエッセンスを纏めたテキスト好評続巻。AI、コロナなど象徴的なキーワードで「今」を伝える。八月三一日刊行。

京都大学学術出版会

▼ホメロス／中務哲郎訳『オデュッセイア』（四六判変型・七九六頁・五三九〇円）叢書刊行25周年、ホメロス二大叙事詩の一つがいよいよ登場。トロイア攻略後のギリシアの英雄による漂流・帰国譚。巧みな散文による新訳で、一冊にて提供。『西洋古典叢書』2022 第1回配本。

以下続刊Ⅱガレノス『身体諸部分の用途について2』、ポエティウス『哲学のなぐさめ』、ケルルス『医学について』、シリウス・イタリクス『ポエニー戦争の歌1』、テオプラストス『植物誌3』

▼研究ステツプ編集委員会著『先輩、研究ってどうやるんですか―ストーリーで学ぶ研究のステツプ』（A5判・二五〇頁・一九八〇円）仮想のストーリーと実践問題で、研究計画立案から実験の実施、成果発表までの研究の全プロセス24ステツプを学ぶ体験型研究ガイド。

▼D・マーチン他著／田中司朗他訳『医学のためのサンプルサイズ設計―臨床試験・基礎実験・疫学研究』（A5判・五四頁・七九二〇円）研究デザインの方から基本的な公式、研究例、現場で使える数表、ソフトウェアまで。

大阪大学出版会

▼菅生聖子著『人工妊娠中絶をめぐる心のケア―周産期喪失の臨床心理学的研究』（A5判・二〇四頁・四八四〇円）人工妊娠中絶体験者の語りをインタビュー調査や質問紙調査から分析。どのような心理的ケアが必要で可能かを探る。

▼渡邊浩崇編『宇宙の研究開発利用の歴史―日本はいかに取り組んできたか』（A5判・四五八頁・六九三〇円）ソ連、アメリカの宇宙開発史、政策史と、日本の宇宙計画を支えた企業の宇宙産業史。

▼桃木至朗著『市民のための歴史学―テマ・考え方・歴史像』（A5判・四〇二頁・二七五〇円）教科書の背景にある歴史学の考え方を理解し、現代の諸課題に対する批判的精神を身に着ける。

▼鈴木七美著『アーミッシュキルトを訪ねて―照らし出される日々の居場所へ』（A5判・三二二頁・二九七〇円）美しいステッチと鮮やかな幾何学模様アーミッシュキルト。彼らの誰一人として見捨てないコミュニティとキルトのかかわり。

関西大学出版部

▼KANDAI for SDGs 推進プロジェクト編『アカデミアが挑むSDGs―関西大学の多様な取り組み』（A5判・二八二頁・一九八〇円）危機に対する社会の脆弱性は世界の格差と結びついており、SDGsの重要さを物語る。関西大学はこれまで、多くの自治体や企業とSDGsに係わる活動をしてきた。本書はSDGsの課題解決に対する関西大学ならではの取り組みを紹介する。



▼河村厚著『スピノザとフロイト―「信仰の同志」の政治思想』（A5判上製・六二六頁・六六〇〇円）フロイトを中心に、ハイネ、ネグリ、シュトラウスという時代も思想も異なる4人の思想家たち。彼らがスピノザから受けた影響と、スピノザ哲学をどのように解釈したかという問題を通じて、それぞれのテクストの厳密な読解を通じて批判的に検討する。

関西学院大学出版会

▼王東明著『中国株式市場の形成と発展（1978—2020）—「移行経済型市場」と国際的インパクトを中心に』（A5判・五九〇頁・七七〇〇円）市場経済化と経済のグローバル化という二つの視点から中国株式市場を考察し、その株式市場の構造的特徴を解明する。



▼圓田浩二著 KGUJ. sci. 社会文化理論研究『ポケモンGOの社会学—ワールドワーク×観光×デジタル空間』（四六判・二六二頁・三九六〇円）ポケモンGOを題材に、社会活動の多くがデジタル社会空間で行われていく可能性を探る。丹念なワールドワークと複眼的な考察。

▼前田祐治著『企業リスクファイナンス—リスクマネジメントにおけるファイナンスの役割』（A5判・一九六頁・三三〇〇円）組織が財物、収益、賠償責任、個人の偶発的な損害に対する補償のため、備金の調達や使用をマネジメントするリスクファイナンスについて論じる。

九州大学出版会

▼押川信久著『朝鮮前期の国家と仏教—僧尼管理の変遷を中心に』（A5判・三四二頁・六六〇〇円）「斥仏」「抑仏」の視点から語られてきた朝鮮王朝の仏教政策の展開を検証し、「儒教国家」と形容されてきた王朝への通念を問い直す。

▼南森茂太著『「民」を重んじた思想家 神田孝平—異色の官僚が構想した、もう一つの明治日本』（A5判・三一〇頁・五九四〇円）明治の鬼才神田孝平の官僚・思想家としての活動を掘り起こす。歴史に埋もれたその業績を掘り起こす。

▼ジョン・A・ダグラス著／木村拓也監訳『衡平な大学入試を求めて—カリフォルニア大学とアフアーマティブ・アクション』（A5判・四六四頁・三三三〇〇円）創設以来のカリフォルニア大学の入試制度改革史を通して、アメリカ高等教育の理想と現実を描き出す。

▼堀尾佳以著『若者言葉の研究—SNS時代の言語変化』（四六判・二二二頁・三三〇〇円）つねに生まれ、変化し、そして消えていく若者言葉。社会言語学の知見と豊富な実例から、そのルールと体系を分析する。

編集後記

▼地理的・文化的な近さにもかかわらず、中国の学術出版事情については知られていないことも多い。学術書の読者や出版人の中でも、積極的に中文圏の情報を得ようという心を持っている人は少ないのではないか（自戒も込めて）。隣国にすら気軽に渡航できない昨今の情勢をうけて、中国の書店・書物・学知はさらに「遠く」なってしまうようにすら思える。

▼そこで今号の特集では、中国の学術書に焦点を当て、実際に何が起きているのか、どのような本が刊行されているのかに迫ろうと試みた。学界・出版界の最前線で活躍されている方々に、それぞれの経験や専門に基づいて寄稿していただき、巨大で豊かな出版文化の一端をご紹介いただいた。日本との違いや共通の課題を浮き彫りにするとともに、今後の学術交流にとっても有益な情報をお届けすることができたならば幸いである。

▼最後に上海や台北を訪れてから五年ほどが過ぎた。深夜発の格安航空便での弾丸旅行、現地の書店の活況——今や懐かしき思い出されるが、そんな日々が再び訪れることを願っている。

- 大同印刷(株) 〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
TEL 0952-71-8550 <https://www.daidou-jp.com>
- ダイニック(株) 〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル
TEL 03-5402-1811 <https://www.dynic.co.jp>
- (株) 太平印刷社 〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16
TEL 03-3474-2821 <http://www.p-taihei.co.jp>
- (株) 太洋社 〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
TEL 058-324-2111 <https://www.p-taiyosha.co.jp>
- (株) 竹尾 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
TEL 03-3292-3617 <https://www.takeo.co.jp>
- (株) 東京弘報社 〒101-0051 東京都千代田区猿楽町1-2-1
TEL 03-3291-1771
- (株) とうこう・あい 〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F
TEL 03-5148-7200 <https://www.toko-ai.com>
- 東光整版印刷(株) 〒135-0006 東京都江東区常磐2-12-15
TEL 03-3632-0801
- (株) トーヨー企画 〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7
TEL 075-411-8288 <https://www.talligent.jp>
- 図書印刷(株) 〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36
TEL 03-5843-9700 <https://www.tosho.co.jp>
- (株) 日新広告社 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F
TEL 03-3263-9431 <http://www.nissinkoukokusyua.com>
- (株) 日本経済新聞社 〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7
TEL 03-6256-7528 <https://www.nikkei.co.jp>
- 日本宣伝販売(株) 〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278
TEL 048-620-1021 <http://www.nihon-senden.jp>
- (株) 博報堂 〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F
TEL 03-6441-6711 <https://www.hakuhodo.co.jp>
- 藤原印刷(株) 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5
TEL 03-3291-0191 <https://www.fujiwara-i.com>
- (株) 平文社 〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
TEL 03-3944-0301 <http://www.heibun.co.jp>
- (株) 毎日新聞社 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
TEL 03-3212-3340 <https://www.mainichi.co.jp>
- 誠製本(株) 〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5
TEL 03-3967-3952 <http://www.makoto-seihon.com>
- 名鉄局印刷(株) 〒450-0003 愛知県名古屋市中区区名駅南3-13-23
TEL 052-561-3272 <http://www.meitetsukyoku.co.jp>
- (株) 遊文舎 〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
TEL 06-6304-9325 <http://www.yubun.co.jp>
- (株) 読売新聞東京本社 〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1
TEL 03-3242-1111 <https://www.yomiuri.co.jp>

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

- (株)朝日新聞社 〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
TEL 03-5540-7749 <https://www.asahi.com>
- 亜細亜印刷(株) 〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
TEL 026-243-4858 <http://www.asia-p.co.jp>
- (株)アベル社 〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
TEL 03-3235-1360 <https://www.abel-sha.com>
- 尼崎印刷(株) 〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
TEL 06-6494-1122 <http://www.amain.co.jp>
- (株)ALE 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階
TEL 03-5652-8627 <http://www.adv-logi-eng.co.jp>
- 王子製紙(株) 〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
TEL 03-3563-7072 <https://www.ojipaper.co.jp>
- (株)加藤文明社印刷所 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE
TEL 03-3261-8281 <http://www.bunmeisha.co.jp>
- 城島印刷(株) 〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
TEL 092-531-7102 <https://www.kijima-p.co.jp>
- (株)桑川印刷 〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7
TEL 03-3943-9811 <http://www.kumekawa.jp>
- ㈱クリムゾンインタラクティブジャパン 〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F
TEL 03-3525-8001 <https://www.crimsonjapan.co.jp>
- 港北メディアサービス(株) 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
TEL 03-5466-2201 <http://www.kohoku.co.jp>
- ㈱コングレゴ-パブリケーション 〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5 オンワードパークビルディング5階
TEL 03-3510-3750 <https://www.congre-gc.co.jp>
- 三松堂(株) 〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
TEL 03-6823-5360 <https://www.sanshodo.co.jp>
- 三美印刷(株) 〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
TEL 03-3803-3131 <https://www.sanbi.co.jp>
- 三立工芸(株) 〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
TEL 03-3261-5171 <https://www.sanritsu-net.co.jp>
- 三和印刷(株) 〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1
TEL 026-285-2300 <http://www.sanwaprinting.jp>
- 信濃印刷(株) 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
TEL 03-3237-3601 <http://www.shinano-insatsu.co.jp>
- (株)渋谷文泉閣 〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7
TEL 026-244-7185 <http://www.bunsenkaku.co.jp>
- (株)眞興社 〒150-0033 東京都渋谷区猿樂町19-2
TEL 03-3462-1181 <https://www.shinkousha.co.jp>
- 新日本印刷(株) 〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
TEL 03-3269-3611 <https://www.sinnihon.net>
- (株)精興社 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9
TEL 03-3293-3021 <https://www.seikosha-p.co.jp>
- 創栄図書印刷(株) 〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766
TEL 075-255-2288 <https://www.soiei-pb.co.jp>
-

市民的不服従

ウィリアム・E・シヨイアマン 著 森達也 監訳

井上弘貴/秋田真吾/藤井達夫 訳 安藤文将 解説

四六判並製 320 頁 定価 3,520 円 (本体 3,200 円+税)

非暴力をもって、法を超えた正義に訴える行動「市民的不服従」。ガンディー、キングにはじまるその歴史を多角的・総合的に論じる。



力 美的人間学の根本概念

クリストフ・メンケ 著 杉山卓史/中村徳仁/吉田敬介 訳

四六判上製 260 頁 定価 3,300 円 (本体 3,000 円+税)

人間は美をいかに捉え、美は人間をいかに主体たらしめるのか。フランクフルト学派新世代の思想家による、美的人間学始まりの書。



スマート・イナフ・シティ

—テクノロジーは都市の未来を取り戻すために

ベン・グリーン 著 中村健太郎/酒井康史 訳

四六判並製 298 頁 定価 3,080 円 (本体 2,800 円+税)

過剰なテクノロジー信仰がもたらす「技術中心の」スマート・シティを回避するにはどうすべきか。現代の都市に住む全ての人々に贈る話題の書。



イタリア料理の誕生

キャロル・ヘルストスキー 著 小田原琳/秦泉寺友紀/山手昌樹 訳

四六判上製 360 頁 定価 3,740 円 (本体 3,400 円+税)

イタリア料理は「政治」と「空腹」がつくった? 多様な史料をもとに複雑な食糧政策と庶民の反応を鮮やかに描く、食のイタリア現代史。



★人文書院 100 周年フェア開催中★



☆下記書店で開催中

ジュンク堂書店吉祥寺店
丸善津田沼店
ジュンク堂書店天満橋店
大垣書店高野店

人文書院

〒612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町9 Twitter @jimbunshoin (税込)
TEL075-603-1344 FAX075-603-1814 <http://www.jimbunshoin.co.jp/>

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覽

◎北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

◎弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

◎東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

◎流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

◎聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

◎慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

◎専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

◎玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

◎中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

◎東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

◎東京電機大学出版局

〒120-8551 足立区千住旭町5番
TEL 03-5284-5385 FAX 03-5284-5387

◎法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

◎武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

◎武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

◎明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-591-9254

◎早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

◎関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

◎名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

◎名古屋外国語大学出版会

〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503 FAX 0561-75-1723

◎京都大学学術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

◎大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

◎関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

◎関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-5870

◎九州大学出版会

〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ305
TEL 092-833-9150 FAX 092-833-9160

◎大阪経済法科大学出版部(休会)

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

【発行所】

一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
E-mail : mail@ajup-net.com
URL : <https://www.ajup-net.com/>

【表紙デザイン】 奥定泰之

【表紙写真】

天津浜海図書館
(Wikimedia Commonsより)



*本誌のバックナンバーは、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードできます

大学出版131号(2022年夏)

2022年9月1日発行

頒価100円(千共)